

# 小田原史談

第 150 号  
発行所 小田原史談会  
小田原市栄町 2-13-20

## 江戸庶民のガイドブック

### 十返舎一九の

### 『伊豆記行ひざくり毛 金の草鞋』 二十二編

ここに載せた図は、弥次喜多道中で有名な十返舎一九が執筆した道中記で、小田原宿をふり出しに伊豆半島を東海岸から西海岸へぐるりと巡って三島に至るまでを記している。

この図を提供して下さったのは前真鶴町郷土を知る会々長の松本敬氏である。

この一編は『武相膝栗毛』（昭和五十八年神奈川県図書館協会発行）に収録されておらず、また一般に広く知れ渡っていない。「せめて小田原の分だけでも資料として掲載されたら」と、松本氏が贈って下さったものである。ここにその厚志に深謝する次第である。また、図に添えられた難解な文章も、赤岩久子氏のお骨折りによって解説出来たことを付記する。

序文を読むと、十返舎一九は実は伊豆旅行をしておらず、天保二年（二三）夏、美濃国中津川の住人知哥丸という人が伊豆を旅して駅々の各所のあらましを書きとめた紀行文を贈ってくれたので、これを元に書いたとある。

なお、序文の最後には、「天保三年辰春 十返舎一九（花押）」とある。ところが、彼は天保二年八月七日六十六歳でなくなっているので辻褄が合わなくなる。

しかし、知哥丸が伊豆を旅した天保二年の夏という点、陽曆で五月下旬から七月上旬に当る。一方、十返舎一九が没したのは、陽曆の九月十二日で、知哥丸から贈られた旅行記に手を加える事は出来たと思われる。版元の錦森堂は、著名な十返舎一九のことだから、没後であっても売れるであろうと見込んだのであろう。序文の次に『肥前金草鞋廿三編』



の刊行予告の序文を載せているのもそれを物語る。この続編は『江之島七温泉金草鞋廿三編』（『武相膝栗毛』に収録）と題して発行されているが、その序文の末尾には「癸巳孟春発版 十返舎一九誌（花押）」とある。

※ それでは試みに小田原宿あたりの処を読み下してみよう。

とうの春（今年の春）金のわらじは伊豆の国へゆく。西は東海道の前より分るゝところ、すなはち熱海温泉街道なり。

小田原はいろいろな名物なれば

ういろいろのひたてのみかぜにかねもくるくるまはるしゆく(宿駅)のはんじょう(繁昌)

てうちん(提灯)のめいぶつとてやあきびと(商人)もくかららず見ゆるおだはら

十返舎一九の文章には江戸庶民の日常の会話がその

### 賑わいみせた

### 久野二号古墳発掘調査説明会

去る九月五日(土)午後二時半から、久野一本松第二号古墳

発掘現地説明会が開かれた。説明者は小田原市教委から委託を受けた調査団の団長山内昭二氏(小田原市文化財保護委員・日大三島高校教諭)。交通不便な場所に拘らず集まった市民の数は、市教委が当初予想していたより遙かに多く、市教委担当者によると、後からポツポツやって来た人も多く、二百名を超えたのではないかと言う。市民の古墳に寄せる関心の深さを示すものである。

古墳は、六〜七世紀(古墳時代後期)聖徳太子が活躍した時代)に築造と推定される円墳。

ま、使われており、駄洒落や卑猥な言葉が躍動していて、膝栗毛が大評判をとってベストセラーになったのもうなづけるのである。一九は明和二年(壬午)駿河の府中(今の静岡市)に下級武士の子として生まれた。長じて武士の身分を惜し気もなく捨て、戯作者の世界に没入したのである。

江戸は爛熟文化の真つ盛り当時すなわち文化文政の

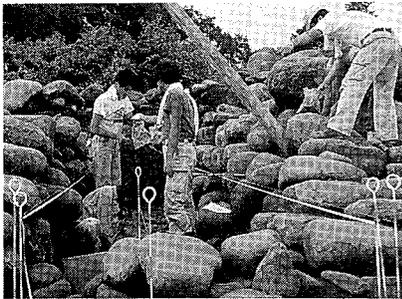
出土品は、横穴式石室の中から、金銅製刀装具、鉄製直刀、鉄鍔(やじり)、鉄製刀子、切子玉、管玉、勾玉、ガラス玉など。金銅製刀装具は、小田原で初めてのもので、県内でも出土例が少ない貴重品という。

石室の側壁西側は大きく崩れ、東側は原形を辛うじて留める程で、天井石は崩れ落ちており、地震が原因と考えられている。

なお、山内昭二団長の説明で印象的であったのは、久野古墳群の保存状態は氏が学生時代発掘調査に従った、今から三十年前と少しも変わっていない、古墳が消滅していても、おかしくない時代なのに、久野の人たち

であり、古臭い身分制度に縛りつけられた江戸庶民は、窮屈な日常生活から逃れて、われもわれもと家を出て旅行ブームを起こしたのである。一九の膝栗毛ものは庶民の絶好のガイドブックとなり、またこの本の刺激によって旅に浮かれ出る人が続出したのである。

なおこの稿は次号に引き続き連載する予定である。(高田喜久三・岡部忠夫)



側壁石の積直しは、チェーンブロックを使用しても一日六〜七個がやっとの事だったという。古墳は元通り埋め戻す由。

伊豆金草鞋三編序

その伊豆の御官大権現はかけまくもかいてこそ天照大神第一の御子に哉昔勝々速日天忍穂耳の尊

小一日本茅二の宗廟関東の總鎮守多うとてや往古より武門誓詞の澄明河連擁護の靈神と

新一奉つる野あり。さく山中の松牙八元の幽道を

阿比洞裡の灵泉は四種の病疴と愈へ二六時中

小十方の善悪邪云と裁断し人々を導く權現の心

本誓ありとてし。神皇后宮三輔を征へしは

神威と船中にも。將軍の旗を現しるは

兵悉く悉神一退きとてい傳ふとてい此神

ひよ抄幡千々姫の尊瓊と將軍と三柱の大れ神

八十萬の神をいさる。高天原より此高根小幸は

うひひくろく人皇芽五代孝昭天皇四十二年瓊村

尊湯の泉の中より灵光と放ち頭はれをい

天下蒼生と憐れとてい此國を湯出の國と稱

うりて今伊豆と喚びし神を伊豆の宮と号し奉つる

此書當國の記行は著とてくもにすか此神の事と

ちよとすいも。當地へ杖とひを。不知案内小一。覚

束みな且下幸あふ夫夏濃洲中津川の和歌光あたる人

當國を披歴し。野々名所をあきす。小書留りて記

行を贈り越せしむり。取敢むその依と著し。これと

例の酒客が生醜の筆なき。宛てて道路の順逆すて

の車の速方も尋く。とてわ識者の批判もろん

ことと希ふものなり

天保三辰春 十返舎一九志

相州 金草鞋三編 全三冊未定發行

廿五編の豆別三編をわくわく此編の三編をわくわく

とて十編をわくわく此編の三編をわくわく

の十編をわくわく此編の三編をわくわく

# 小田原叢談(十)

## 石井富之助

### 小田原ばやし

最近、民謡のブームに乗って各地の神事太鼓、祭太鼓が紹介され、なるほど祭太鼓は日本全国どこへ行ってもないところはないのだから、あらためて感心させられるのだが、小田原にも古くから独特なたたき方の小田原ばやしが伝承されている。

古いといってもいつから始まったという記録があるわけではないし、そうかといって明治以後に起こったという気配はまったくないのだから、やはりその起源は江戸時代だといってよいと思う。

小田原ばやしの曲目には、はやし、聖天、鎌倉、四丁目、神田丸の五種類がある。これらの名称は小田原だけのものではなく、ほかの土地の祭ばやしで、たたき方はまったく違っているが、同じ名称を使っているところ

ろが方々にある。

小田原にはこのほかにも一つ馬鹿ばやしというのがある。これはわたしの記憶では、大正天皇の御大典の時に今度馬鹿ばやしという新しいのが増えたといつて練習していたのを覚えてる。

ともかく、はやし、聖天、鎌倉、四丁目、神田丸の五種類の名称が方々にあるとするならば、その源流は一つだと考えてよさそうである。

試みに関東の祭ばやしのものだとされる葛西ばやしについて大百科事典をひいてみると、

葛西ばやし 下総葛西に起り、現在も広く東京地方に行われる祭礼のはやし。一説には葛西金町の鎮守香取明神の神職能勢環が、享保の頃、村民に和歌ばや

しなるものを教え、それが発達して葛西ばやしになったという。宝暦三年千住に売色のもの現れ、農村青年の風紀をみだした時、葛西の代官伊奈半左衛門が憂慮して、農村娯楽として葛西ばやしを広く奨励し、同十二年より江戸の日枝神社、神田明神の祭礼に出演せしむなどの保護を盡した。これが縁となって東京市内外の青年、農民等は祭礼以外の折にもつばら娯楽として喜び、今日に及んでいる。馬鹿ばやし、ライジョ、テコメン舞、狐ばやし、鎌倉、越後等の曲目がある。歌詞はなく、はやしだけで、踊りは曲目により行われる。

これが各地に広まり、小田原にも伝わってきたのはなかるうか。そして、長い間にたたき方に工夫がこらされ、新しい手が編み出されて現在の形になってきたのではなかるうか。そう考えることが最も自然のようである。

たたき方に工夫が加えられていることは大正時代と

今のたたき方とを比べただけですぐわかる。大正時代には今よりずっと早間であったし、小太鼓と大太鼓とのからみ方にも相当の変化が見られるのである。

わたしの覚えている大きな祭は、大正四年(一九一五)の大正天皇御大典の時と大正九年小田原駅開通の時との二つの祭である。両方とも、山車、屋台あわせて二十台以上も出たと思う。それが前者の時には御用邸前に、後者の時には小田原駅

前に勢ぞろいをし、はやしを競い合ったのだからまさに壮観であった。

鎮守の祭とちがって全町挙げての祭であったから、その意気込みもたいへんで、この町内でも一か月も前から太鼓の練習をしたものであった。馬鹿ばやしが入り込んできたのは御大典の時だったように思う。そのころわたしはまだ子供だったから練習をそばで見ているだけだったが、駅開通の時には仲間に入れてもらっ



第25回県民俗芸能大会 於：相模原市民会館  
昭和63. 11. 6 小田原囃子多古保存会  
(写真提供 小林 堯氏)



陽曆、現行されている太陽曆の三つがある。然し、今でも未開の社会では厳密な曆を持たないで、恐らく人類の極く古い頃と同じ時代の曆法を使用しているであろう事は難くない。

太陰曆

「太陽の再び大きくなる月」から始まり「木の葉の落ちる月」「草木の芽生える月」と云うようにアイヌの曆と同じように気象・現象を基準にしているのも面白い。

マホメット曆

○五八九日である。従って今ではほぼ二九日の小の月と三〇日の大の月を交互に並べれば解決出来る事が知られているが昔はそれに思いが及んだのはかなり後の事である。

太陰曆は、月の周期的変化を基準にした曆で、新月、上弦、満月、下弦と世界の全ての民族が一度は経験した曆法で朔望月を根拠としているのである。然し厳密には月の公転の周期が複雑の為色々混乱があった。例えば朔望月(新月から新月更に新月迄)を用いた曆であるが、一朔望月が約二九日半、正確には二九、五三

「木の葉の初めて落ちる月」「蛙の来る月」のように身近な現象により一年を区分して最後の月は「海が凍る月」で終わっている。アメリカの『インデアン』の曆もイロコイ族の一年には

マホメット曆(イスラム曆、回歴、とも云う)この朔望月は正確で、三〇年を一周期とし、その間に一年を三五四日とする平年一九年と一年を三五五日とする閏年を一年としていた。朔望月の誤差は太陽年で換算すると二四〇〇年で一日の誤差を生ずるに過ぎない事が計算されている。然し太陽曆年との誤差は毎年約一

最近の出来事

(新聞・テレビ)の報道より

五月十二日(火)

○箱根強羅郵便局、箱根町と連携、ファクシミリを使って住民票交付サービスを始め。関東では最初、全国で三番目。

五月三十日(土)

○小田原市板橋の小田原市立郷土文化館分館の松永記念館別館落成式。総工費約一億三千九百万円余。

六月七日(日)

○梅雨入り(明け七月廿日)

六月二十一日(日)

○山北町谷峨の産業廃棄物処理場建設計画をめぐって、山北町体育館で、「産業廃棄物を考える集い」が開催され、処理場建設反対の宣言が採択された。

七月一日(水)

○JR御殿場線下曾我駅前

七月七日(火)

○小田原市早川でヒメホタルが自然発生、話題となる。

七月十七日(金)

○小田原市寿町終末処理場の上の「寿町ふれあい広場」開場式。総工費約六億七千万円。一般供用は十八日。

七月二十四日(金)

○山北町「洒水の滝」を題

八月五日(水)

○JR小田原駅のコインロッカーから短銃二丁、実弾十二発を押収。暴力団からの足を洗いたい者からの警察への電話による。

八月十二日(水)〜十六日(日)

○92インターナショナルスポーツカイトフェスティバルが酒匂川スポーツ広場で開催。小田原市補助金三千万円支出で話題となる。

七月二十九日(水)

○参議院選挙

七月二十六日(日)

○箱根町元箱根の県立恩賜箱根公園に旧箱根離宮御殿を模した休憩施設「湖畔展望館」落成。総工費三億四千万円、延べ面積四〇、四〇〇㎡。

七月二十四日(金)

一日となり三二年で丁度一年の食違いを生じる。(続)

神奈川県和算研究会(仮称)結成

同好会員を募ります!

かねてより、県内の算額の発見、研究、復元奉納等地道な研究を続けている「日本数学史学会」の会員が中心となり、広く同好の人達に呼掛けて、『神奈川県和算研究会(仮称)』を結成、来る十二月六日午後一時より小田原市旭丘高校において発会式を行う事となりました。県内に眠る和算資料、古い数学書、珠算関係の教育資料、更に寺子屋時代の教育や、藩校の教育制度等広い調査や研究が目的であります。

本小田原史談会会員の過去の埋もれた史実についての真摯な研究を期待し、是非入会頂くよう御案内致します。又研究会の御案内を致します。

詳しい事は下記に御照会下さい。

世話人代表 天野 宏(本会会員)

〒250-0102 箱根町湯本茶屋十八

☎ 〇四六〇一五九九九

## 近代小田原百年小史稿(七)

## 高田喜久三

## 昭和前期(二)

昭和初年、最悪の経済不況に見舞われた我国は、折角手にした大正デモクラシーの果実を、瞬く間もなくふり捨て、テロ横行の中で、軍部独裁の狂気の世界へと突進せねばならなかった。

昭和七年五月十五日、軍人による犬養首相襲撃(いわゆる五・一五事件)を第一段階として、我国の政治は一路暗黒の途をたどり、昭和

十一年二月二十六日の有名な二・二六事件によって議會政治は完全に滅んだのである。これらの軍部勢力による政治変革は、反面で中国戦線における軍事行動をバネにして、国内政治の独裁を強化し、昭和六年の満州事変から昭和十二年の日中戦争へと軍事行動は拡大するばかりであった。

中国大陸における戦線拡大につれ、小田原からも多くの出征兵士が戦地へ渡り、毎日々々出征兵士を大陸へ送る壮行行列がのぼり旗を

つらねて小田原駅頭を賑わした。一方市民の暮らしも

次第に物資不足となり、米が配給制になると、つづいて衣料も切符制となり、炭も酒も砂糖も姿を消した。そしてガソリンの不足は街に薪自動車を出現させた。

そんな中でも小田原では丹那トンネルの開通を祝い(昭和九年)箱根登山電車の小田原駅乗り入れが実現した。

やがて昭和十一年には待望の上水道が完成し、御幸の浜にプールが出現した。

だがこの時代、小田原として最大の変革は昭和十五年十二月二十日に小田原市制が実現したことである。このとき足柄町、大窪村、早川村、酒匂町の一部(酒匂

川以西)が合併され、小田原市の人口は五万四千六百九十九名、一万七百四十九

の世帯を数えた。市制施行祝賀会は小田原城趾天守閣前広場で、園遊会方式でひらかれ、新市長益田信世の発声で万歳が叫ばれた。

このときには天守閣の石垣も関東大震災で崩れたまま、現在のように整備された本丸ではなく、周囲の古松のみが風に鳴る淋しい広場であった。市庁舎は今の検察庁、警察署の在るものと第二小学校(のちに城内小となる)の跡地にすでに建設されていて、この一角が小田原市行政の中心地となったのである。

しかし皮肉にも小田原市が市となった翌年の昭和十六年十二月八日には、我国は対米英戦宣言布告をし、戦争は一旦に新段階、いや苛烈な絶望的段階に突入したのである。しかもこの太平洋戦争では日中戦争とちがって内地も戦場となる運命にあった。やがて防空演習が日常茶飯事となり、日常生活は極端に管理され、威勢のよい大本営発表にも拘らず、市民はきょうの食料調達に駆けまわらざることを余儀なくされた。そのうち米軍機による空襲の惨害が伝えられはじめ、小田原の市民は戦場の中で暮らすことになったのである。その当時のことを今、憶い出せば、

目も耳も口もふさがれた真っ暗やみの中で、狂気の日夜の暮しを強いられたのである。

昭和六年の満州事変勃発から数えて敗戦の昭和二十年八月までを、こんにちでは十五年戦争と呼んでいるが、十五年の永い歲月の中を私たちは戦争の悪夢にもまれ、もがき苦しんでいたのである。多くの肉親を喪い、職業をはぎとられ、あるいは家を焼かれて、それでも誰もが日本が敗けるとは予想もしていなかった。

ただこのように苦痛の日夜にも拘らず、さきに誌したように東海道線全通、あるいは小田原市制施行の明るい発展の軌跡を見ること

が出来るのは、人間の営みが意外としぶといものである。戦争晩期、小田原市民は毎日配給物の行列に並び、商店は閉店して店主は工場に徴用され、学生生徒も学業を捨てて勤労動員に日夜を過ごした。そして間断なく行われる防空演習に駆り出され、夜は空襲警報に起こされて小田原の町は索漠として火の消えた町となったのである。

やがて戦況がさらに悪化するると小田原にも国土防衛

の兵隊が乗り込んで来て町は完全に戦場となった。昭和二十年に入ると、三月十日の東京大空襲、つづいて横浜も炎上、平塚が爆撃されたのちは、次は小田原かと市民もいよいよ覚悟を決めた。この頃には町のあちこちに疎開建物の空地が目立ちはじめ、市民は空襲を覚悟して家財一切、畳、建具に至るまで田舎に疎開させ、ついに市内は死の町と化したのである。

そのような状況の中で昭和二十年八月十四日夜、小田原はたった一機の米飛行機の焼夷弾投下をうけて十五日の朝までに、宮ノ前、高梨町、青物町、一丁田、台宿今という国際通りを焼失したのである。この空襲で小田原では四百二戸が烏有に帰し、死者四十八名負傷者六十五人という悲しい犠牲を数えたのである。しかも余熱いまだ消えやらぬこの日の正午、皮肉にも終戦の放送が伝えられたのである。いち早く引き上げて行った兵隊たちの跡に立つて、市民は茫然自失、うつろの眼で折から咲きほころぶ百日紅の紅い花を眺めたのである。

# 日華事変初の応召情景

小田原駅前通りの三角帯にある店の二階(現日興証券小田原支店)から撮影したものとと思われる。

に柏木恭平さん宅(小田原市南町四丁目)を訪れると、恭平さんは既に昭和五十二年二月に物故されていたが、幸い未亡人のツギ子さんが元気でおられ、はっ



真鶴町郷土を知る会々長 桜井光夫氏提供

きり記憶されていて、また、ツギ子さんの話から、岡田八重吉さん(前列左より三番目)小田原市南町四丁目)が健在であるのが分り、お二人の話から、その年月日が特定でき、当時の様子が分った。

この日、昭和十二年(一九三三)九月六日(月)居神社に詣でたあと、松原神社の社頭でうち揃い、ここから小田原駅前進行進した。一列目の幟には、岡田・柏木の外に、戸倉十郎、木村□一郎の名が見える。居神さんを産土とする十字町(現南町)や板橋の人達だという。

六日に出発した訳ですが、みな現役兵として軍隊経験のある予備役に服している者ばかりが召集を受けました。私は満二十四歳で、一番齢が若く、独身だったのは私一人だけでした。他の人は全員世帯を持っていた」と、今年七十九歳の岡田さんは語る。召集令状がくれば、いやが応でも妻子と別れを告げなければならぬ時代であった。

岡田さん柏木さんの両名は、この日、昭和十二年(一九三三)九月六日(月)居神社に詣でたあと、松原神社の社頭でうち揃い、ここから小田原駅前進行進した。

二カ月前の七月七日、北平(現北京)西郊の蘆溝橋で日支両軍が衝突、政府は不拡大・現地解決主義をとり、「北支事変」と呼んだが、八月十三日になると上海に飛火。十五日、政府は「帝国としてはもはや陰忍その限度に達し、支那軍の暴虐を膺懲(ごらしめ)し、もって南京政府の反省を促すため、今や断固たる措置をとるのやむなきにいたれり」との声明を発表。国民は素直にそれを信じた。満州事変の真相を知らされず、以来国民は操作された情報の中に置かれていた。

「津田部隊に所属して上海戦線に送られたのです。大場鎮近くで、第一線の名古屋の第三師団と交替しましたが、三師団は蒋介石の国府軍の精銳に痛めつけられて、第一線を守っていたのは、後方勤務の筈の輜重連(弾薬や食糧を運搬する兵卒の中に輜重兵と改称された)でした。一緒に応召した仲間が戦死した人もいます」

二列目には、杉山正時、中山三郎、森田国松、石間政吉、齋藤秀蔵の名が認められる。松原明神を産土とする人達らしい。「祝出征」の十六本の幟を支えているのは、青年学校の生徒であろう。青年学校は、従来の、勤労青少年を対象として実業補習学校と軍事教育を目的とした青年訓練所を統合した学校で、二年前の昭和十年(一九三二)十月に発足している。

無理もない。小田原では、日華事変が勃発して始めての応召だったからである。

夫が戦死しても、人前では、「お国のために戦死をしました」と、涙をかくして挨拶しなければならなかった。

沿道には日の丸の小旗をうち振る小学生や声援を送る町民。「バンザイ」「頑張ってきて」といった歓声が伝わってくるようである。

士気を鼓舞するためのブラスパンドの演奏や軍歌を歌うこと

「召集令状は九月一日に來ました。甲府に入隊は九月七日で、

九月二日、政府は「北支事変」の名称を「日支事変」と改称した。「日華事変」とか「日中戦争」といった呼名は戦後の反省の上にたつたことである。

「註」 幟をおしたてブラスパンドによる入隊する者を歓送するのは昭和十六年一月までで、この年の七月、閣特演の大動員以降、幟や襷それにブラスパンドは勿論のこと、町村民等々の歓送は、防線上の理由で禁止された。

(南里 哲)

# 私の早川村誌 十三

## 『皇国地誌』を読んで

青木友吉

維新政府は、近代統一國家を目指し、幣制改革(明治四年五月)、廃藩置県(同年七月)、学制(五年八月)、徴兵令(六年一月)、地租改正(同年七月)などの諸政策の推進と共に、地誌に関する調査を全国的規模で実施するに至った。

すなわち、明治八年(一八七五)、「皇国地誌編集例規並着手方法」を定め、村誌及び郡誌を内務省地理寮へ提出するよう、開拓使・各府県に命令。『皇国地誌』を編集することになった。

### 第九拾七号 使府原

皇国地誌編輯例則并ニ着手方法別冊ノ通相定候條右ニ照準シ精覈調査シ地理寮ヘ可差出此旨相違候事

明治八年六月五日

太政大臣 三條實美

第九拾六号 使府原

本年六月第九拾七号

ヲ以テ皇国地誌編輯例則達候處猶別冊ノ通追補候條此旨相違候事

但取調方ニ付難解廉ハ直ニ修史局ヘ照会可致事

明治八年十一月十三日

太政大臣 三條實美

村誌には次の項目を記述することが定められた。

村名・疆域・幅員・管轄沿革・里程・地勢・地味・税地・飛地・字地・貢租・戸数・人数・牛馬・舟車・山・川・森林・原野・牧場・鑛山・湖沼・道路・堤塘・港・出崎・島・暗礁・燈明台付燈明船・瀧・温泉・冷泉・公園・陵墓・社・寺・学校・町村会所・病院・電線・郵便所・製糸場・大工作場・古跡・名称・物産・民業・人物

また、前記の追補により、

戸数以下人員・馬・舟・車は明治九年(一八七六)一月一日調べを以て記帳することになった。

ついては、『早川村誌』の戸数と人数を見ると次の通りである。

本籍士族	二戸
全 平民	百六十九戸
社	一戸
寺	五戸
堂	一戸
総計	百七十八戸
本籍士族男	三人
全 女	三人
全 平民男	四百八十九人
全 女	五百十九人
総計	千十四人

なお、『村誌』が脱稿される時期は、村によって多少違いがあるが、『早川村誌』の場合は、地誌編集の太政官達が出されてから十年経た、明治十八年(一八八五)十二月二日の事である。それでは、『早川村誌』の項目のいくつかに、関心が寄せられるものがあり、私なりのコメントを加えたいと思う。

### 川

早川 十六夜日記(建治三年(三七七)十一月二十

日藤原為相ノ母阿佛)ニ

日麓ニ早川ト云川アリ實ニ早シ木ノ多ク流ル、ヨイカニト問ヘバ海人ノ藻塩木ヲ浦ヘ出サントテ流スナリトイフアヅマチノユサカラコエテミワタセバシホキナガルルハヤカワノミズ(以下略)

車川 丑十五度本郡板橋村ヨリ字奥平時ニ来リ東北部ヲ東ヘ七百二十ニ間或ハ三間東ニ度字向河原ヨリ海ニ入ル全村水田ノ用水ニ供ス

字木地挽より谷戸川が別れ山裾をぬって西に流れ、途中金堀沢の湧水を合せて東流して海に入っている。古の車川は、塩木を早川より取り入れ、木地材と塩木とを木地挽の集落で揀別した。そして木地挽の字名が発生した。

なお車川とは、水車のある川の意で、徳川幕府明和四年(一七六七)の御觸書には次のように記されている。

関東筋ニて作出候綿実之儀、此度江戸小網町貳町目多田屋直三郎、神奈川宿源兵衛え買間屋願之通申付、右買受

図に示す如く現在の字上

候綿實相州足柄「下」郡早川村ニおゐて燈油絞、江戸油問屋え賣渡候者ニ候、依之関東八ヶ國より作出候綿實之内、是迄大坂表え積登候分は格別、其餘は右貳軒之間屋え可賣渡候此旨荷主中買并寄屋共ニ至迄急度可相心得候右之通、御料は御代官、私領は領主、地頭より可觸知者也、三月

### 道路

早川村に集荷された綿実は車川で水車絞りされた。

関白道 寅ノ方字下河原ニテ熱海道ヲ分レ中部ヲ西ヘ登ル千貳百間丑廿七度旧城ノ表門ニ抵リ(此所ヨリ西北ハ本城ニシテ高キコト凡十間)尚登ル七百七十間丑廿五度頂ナル字大杉ノ久保ナル早川山ノ上下ニ(此所四方ニ土手アリ平地六百坪)達シ平路ヲ九百七十間未廿六度字南畑ヨリ本郡鍛冶屋村ヘ通ス。

下は標高八百メートルの平地にあり、此所四方に「土手アリ平地六百坪」は字酸漿荒の御床山(標高八六五メートル)にあり、この差は地租改正の地押丈量による誤差によるものであろうか、南畑とある字名は南山の誤りであろう。

古蹟(一)

豊臣大閣秀吉公陣所  
址 石垣城或ハ一夜城  
トモ：ノ文中、金堀沢  
ハ城跡ノ南崖下ニシテ  
是築城ノ時鍛工ノ住シ  
處ナリト云フ一涌水アリ  
リ其辺ニ今モカナクソ  
居多シ

金堀沢の地名に疑をもち、鍛冶跡なら鍛冶沢とか鍛冶屋となつて当然であり、金堀とは生産に結びつくのではないかと沢中を注意深く金葉の採集に努力した。湧水の中から一箇の金葉を得ることが出来た。

昭和五十二年(一九七七)一月二日のことである。

村の鎮守の紀伊神社(紀宮大権現)祖神は五十猛命といはれ、伊太氏すなわち五十猛命は製鉄の神と山本博著『古代の製鉄』で論証

されている。何故金葉が多く採集されなかつたかは、昭和に入つての大きな出水と、農道の構築により荒らされてしまつたことによる。

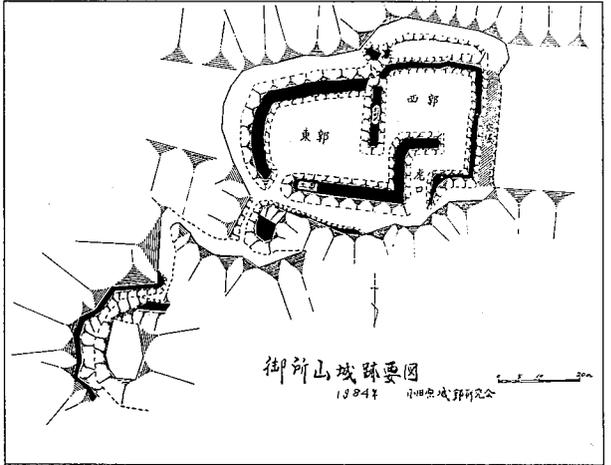
小田原在住の鉄の権威者窪田蔵郎氏の当該鉄滓について化学分析データならびに顕微鏡写真が出来たのは昭和五十二年の秋のことである。

FeO(第一酸化鉄) 三・九%  
Fe(鉄分の計) 四・八%  
SiO(チタン) 六・八%

顕微鏡写真では明かに生地の特徴に異なる不均一ではあるがマグネサイトが散つており、砂鉄を原料として鉄を製錬した場合に発生する鉄滓であることが科学的に判断出来た。

金堀沢の製鉄の時代、背景は全く不明ではあるが豊臣北條に結び付けるのは無理があると窪田氏の言である。

なお石垣山城址を管理さ



れた月村氏が、昭和の初め城内より鍛冶滓を発見されたことを附記する。

古蹟(二)

彼関白ハ天狗力神カ加様ニ一夜ノ中ニ見事ナル屋形出来ケルゾヤト恐怖ノ思ヒヲ成セリ。

(一夜城ノ名モ此時ヲ云ナルベシ按フニ北條盛衰記ニ大森久頼ハ寄栖庵ト改名シ岩原ニ移リ内山・河村・石垣山・岩原山ノ四ヶ所ヲ皆藤頼ニ譲リテ清泉院ヲ建立シ大森代々ノ菩提所ト定メケルト見ユサレバ此頃既ニ石垣山

早川村西部山岳地帯



ニ城アリシナルベシ夫ヲ此時増築セシニヤ。

以上の事の論評をきかぬいは全く無視されているのではないのか、一考を要する文章であると思われる。

郵便局

五等郵便局 字西組  
取扱人鈴木銀次郎ノ宅  
ヲ假リニ用ケル  
ところが、鈴木銀次郎は  
明治十六年(一八八三)十一月

三十日死亡、三十四歳で早川正蔵寺に埋葬されている。

『皇国地誌』の記録は、明治八年、地誌編集の太政官達が出されてから脱稿の明治十八年に至る迄の十年有余の年月に加除訂正されるべき記事が、年月のズレのままになっているのではないかと考えられる。

なお小田原町には明治七年(一八七二)八月二等郵便局が設置された。(了)

# 酒匂の古寺福田寺

## 後の南蔵寺の所在について

川瀬 春雄

### 一 南蔵寺について

酒匂町の中程、国道に平行した山側の裏通りに南蔵寺が建っている。

明治初年頃迄は、百二十戸程しかなかったこの酒匂の村に何故か十三もの寺があった。其の中で南蔵寺は特に古く八百年もの歴史を持った寺であった。

『新編相模国風土記稿』(以下単に『風土記』)には次の様に記されている。

南蔵寺 酒匂山 中古龍光山ト改メシコトアリ。コハ萬治三年六月、仁和寺門主当寺へ寄興アリ。其頃境内北隅ニ、龍燈出現ノ古松アリシヲ以テ、酒匂山ト改メ、龍光山ト号スベキ由、令旨ヲ賜ハレリ。後天明二年ノ回録ニ、令旨烏有トナリ、又龍燈松モ枯楠サシカバ、旧号 不動院ト号ニ復スト云。 不動院ト号ス。古義眞言宗 国府津村宝金剛寺 寺伝ニ古ハ福田寺ト号シ、寺地モ今ノ所在

ヨリ、四五町ヲ隔テ、ア

リ。村内不動免ト呼ブ水田是ナリ。今モ当寺ノ持地ナリ。今ノ寺号ニ改メシ年代詳ナラズ建久ノ初鶴岡海光院 院ノ一。供僧十二ノ開山義慶 武蔵阿闍梨ト号ス。当寺院へ隱栖ス。(義)慶ハ頼朝卿ノ帰依僧ナリシカバ、同三年八月、御台所平産ノ祈禱ヲ命ゼラル。東鑑曰八月九日、御台所産氣、鶴岡神社仏寺、奉神馬、被修誦經。福田寺酒匂按スルニ仏閣 (以下略)十五寺ノ一ナリ

この南蔵寺については大正の頃に書かれたらしい酒匂の地図に南僧寺跡とあったのを見たことがある。それは町の中程国道の海側であった。この記憶と別に明治の頃、今の裏通りの南蔵寺へ国道の海側から墓石が移転して来たと言ふ話をその当時(昭和五十年頃)寺守をしていた老嫗から聴いた事があった。

その場所とは、今の南蔵寺から直線距離で百メートル程の国道の海側の地域であることも明らかになった。これ等の事からこの南蔵寺は国道海側から山側の裏通りへと移転したことがわかる。

海側のこの辺り(上輩寺の海側)を歩いて見ると、中世のものと思われる五輪塔、宝篋印塔のくずれたものを無造作に積重ねたものが五、六基一ヶ所に集められている。これ等のものが南蔵寺の名残の様である。

『風土記』の文中の「今の寺地」とは、すなわち国道海側のこの場所を指すのであって、平成時代の今国道山側の裏通りにある南蔵寺は『風土記』に記された時点より後になって此の所へ再度の移転をしたと言う事である。最初の移転について其の理由は不明であるが、二度目の移転は何時どの様な理由があつてなされたのであろうか。この事については今は知る人とならない様であるが、よく調べてみると、それは今から九十年前の明治三十五年(己丑)十一月二十八日の事で、季節外れのかつて経験しなかつ

た大きな暴風が三日間にわたって吹き荒れ、相模湾一帯は想像もしなかった大津波に襲われ、多数の人命を失い、家屋を流失したと言ふ(この事については故中野敬次郎先生の『小田原近代百年史』にも書かれている)。

南蔵寺は、この大波に呑まれた、かなり老朽化していたので倒潰したであろう。その後現在地へ移転したのが事実である。

### 二 酒匂福田寺の所在について

酒匂の地に福田寺と呼ぶ寺があつたとの記録がある。それは八百年も以前の事であつて今は誰一人としてその名を知る者はいない。前記の『風土記』によれば、福田寺は現在の国道一号の中程の裏通りにある南蔵寺の前身であると書かれている。何時の時代か寺号が南蔵寺に変わり其の所在も一転二転して現在の所に落ち着いたという。

前記に引用の『風土記』には、建久三年(二丑)八月福田寺において源頼朝夫人政子の平産祈願がなされたとあるがその時「神馬を奉り、誦經を修」した、

相模国の神社佛寺とは次の通りである。

- 福田寺 酒匂 平等寺 豊田
- 範隆寺 平塚 宗元寺 三浦
- 常蘇寺 城所 王福寺 坂本
- 新築寺 小磯 高麗寺 大磯
- 国分寺 一宮下 彌勒寺 波多野
- 五大堂 八幡、大会 御堂と號す
- 寺務寺 觀音寺 金目
- 大山寺 靈山寺 日向
- 大箱根 惣 社 柳田
- 一宮 佐河 二宮 河勾
- 三宮 大明神 四宮 大明神
- 八幡宮 天満宮
- 五頭宮 平塚 黒部宮 平塚
- 加茂 柳下 新日吉 柳田

この中の福田寺酒匂とあるのは、鎌倉時代初期にこの酒匂に存在していた事を示している。この福田寺が特に由緒ある大寺と言う事でもなかつたであろうに、何故箱根神社、寒川神社の様な格式高い神社と肩を並べて祈願所となつたかについては、『風土記』に書かれている様に、当時この福田寺に將軍頼朝の帰依僧であつた義慶なる僧が隠棲していたので、鎌倉から平産祈願を命ぜられたと記されている。ここに出てくる福田寺に関する事蹟は僅か

はあるが、酒匂の最も古い寺であり、それが鎌倉將軍家と関わりを持っていたと言う事は？酒匂の歴史の一つとして記憶に留めておきたい事である。

ところでこの福田寺は酒匂のどこにあったのであろうか。この小さな歴史の疑問点について筆者は、かなり以前から折りにふれあれこれ思い巡らせてはいたが一向にこの言って思い当たる様な場所は浮かび上がっては来なかった。この事については既に記した『風土記』の寺伝によれば、「古ハ福田寺ト号シ、寺地モ今ノ所在ヨリ四、五町隔テ、アリ。村内不動免ト呼ブ水田是ナリ今モ当寺ノ持ニテ租地ナリ。今ノ寺号ニ改メシ年代詳ナラズ」とある。今はこの一文だけが福田寺の所在についての謎を解く鍵として残されているだけである。

しかし、その方が不明であり不動免なる字名も今は、全く消失し何の手掛かりも残されていない。

が、今の所より四、五町とある記述が唯一のヒントではないかと考え、国道海側の南蔵寺跡を中心とした

四、五町(西〇〇六〇米)地域を様々々々巡らせたが容易に思い当たる場所は見当たらなかった。

が、やがてぼんやりとではあるがこの辺ではないかと思われる場所が浮かび上がった。それは、南蔵寺跡を中心とした四、五町と言う距離的条件ともう一つ鎌倉初期の酒匂集落の姿(當時は恐らく東海道に面した両側に一軒並びの民家とたった一つの横町である神社の参道に僅かの人家があるだけで全体で百戸前後ではなかったか)の両面からの推理の結果、バス停「酒匂中学」の北へ百八十メートル入った酒匂神社の周辺こそ福田寺の所在地ではなかったかと思えてきたのである。とはいえこの事について今は何一つの物的証拠も伝承も見当たらない。

ところで、ここに出てくる酒匂神社が福田寺の存在と何等かの関わりがあった事が『風土記』の記述の中に見ることが出来る。それは、酒匂神社は、明治初年迄は駒形社と呼ばれ古くより南蔵寺がその別当寺であったと伝えている(別当寺とは寺の僧侶が神社の管理運営

をすることで古くから一般的に行われてきた。この神仏混合の時代は明治初年迄続いていた)。

酒匂の歴史の中で最も古いであろうと思われる箱根権現文書の中に、鳥羽太上皇酒輪郷四十八町を権現に寄進したとあるは、既に衆知の事であり、又同文書の中に「鳥羽上皇酒輪四十八町寄進の当時権現の一の鳥居酒輪にありしと言ふ」との一文がある。これらの事は平安末期、今より八百六十年程前(二三年頃)この酒匂が箱根神社の社領となり街道には鳥居も建つなど神社と酒匂郷とのつながりは深いものであったようで、やがて村民、権現の奥宮駒形社の分霊を勧請、土地神として酒匂駒形社をここに祀られたのであろう。と筆者は考える。

もしこの推理が正しいとすればこの駒形社は酒匂の集落と共に八百六十年の歴史を生きてきた訳である。又前出の頼朝夫人政子の平産祈願の相模国神社仏寺の中に加茂柳下とあるのは現在の鴨ノ宮の加茂神社を指すもので、この頃既に隣村にこの様な神社が祀られて

いた事実から考えても、この年代酒匂に土地神が祀られたとしても当然の事ではあったろう。この様な理由から福田寺と駒形社の何れが先に創建されたのかはわからないが、頼朝夫人政子平産祈願のなされた頃にはこの酒匂神社が酒匂の地に存在していたであろう事が十分に考えられる。

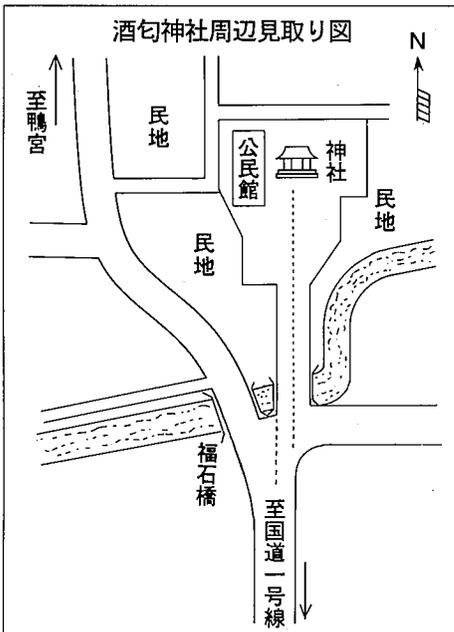
ところで、この福田寺が駒形社の別当寺であったと言う関係は、これが何時の頃に生じたのか不明であるが、恐らくこの二者が酒匂の地に並立した時点からのものと考えてよいのではなからうか。

福田寺はこの駒形社(今の酒匂神社)の周辺というよりむしろ隣接した所では

なかったらうかと思われる。駒形社(現在の酒匂神社入口の西側の道路を隔てた一面は、源頼朝鎌倉開幕のころ、頼朝や重臣達の東海道往来時の宿泊施設が造られた場所、抽稿『小田原史談』一三〇号「酒匂はんべの宿について」に詳細)の存在については『吾妻鏡』の中に「酒匂はんべの宿」或は「酒匂はんべの御所」として記されている。以来八十年もの年月幕府公用施設としての役割をはたしてきた事が記録の所々から読みとれる。

当時民家も恐らく百軒にも満たなかったであろう小さなこの酒匂の集落の中にあった福田寺と「はんべの宿」との間に何等かの関わり

酒匂神社周辺見取り図



りもなかっただろうか？考  
えられる事は、「はんべの  
宿」が造られる迄の酒匂に  
おけるこれらの人々の宿泊  
は、一般的には最寄りの寺  
を利用するのが通例であっ  
たことを考えると、「はん  
べの宿」が造られる迄の間  
は福田寺が其の役割を果た  
していたのであろう。福田  
寺が鎌倉幕府と関わりを持  
たのは恐らくこの事による  
ものであろう。この関わり  
により「はんべの宿」が造  
営されたものと思われる。

東海道から北へ外れて当  
時は、雑木や篠竹が密生し  
て殆ど人目に触れることが  
なかったであろう駒形神社  
脇のこの場所が、幕府公用  
の宿泊施設の地として選定  
されたのは、この福田寺の  
存在によったものであろう。

この様に考えてくると、福  
田寺は駒形社と「はんべの  
宿」のどちらにも関わりが  
あり、『風土記』の中の四、  
五町と言う記述から、その  
所在地はどうしても駒形社  
(酒匂神社)の周辺と言うよ  
りむしろその隣接地ではな  
かったかとの思いが次第に  
強くなってきた。とは言  
ものの立証する様なものは  
容易に見当たらず時がすぎ  
ていった。

### 三 酒匂神社入口の謎

鎌倉時代初期酒匂にあっ  
た福田寺とは、一体どこに  
在ったのか？酒匂神社の周  
囲を見回しても民家が建並  
んでそれらしい場所は全く  
見当たらない。が、神社の  
近くに住む筆者は、何時も  
この疑問をかかえながら其

の周辺へ関心を持ち続けて  
いた。

国道一号線のバス停酒匂  
中学から北へ神社入口迄の  
百六十米、幅四米のこの直  
線道路は、江戸時代から横  
町と呼ばれてきたもので、  
この道路が直線であると同  
時に正確に南北方向を指し  
其のまま社殿の正面に向かっ  
ているのを見て感じたこと  
は、この道路は神社の創建  
と同時に造られた参道では  
なかったかと思えるのであ  
る。

何故この道路にこだわ  
かと言うと、五十年近くこ  
の道路沿いに住みなれた筆  
者は、朝夕この道に立ち右  
に神社の入口を眺め左に国  
道の動きを眺めてきた。そ  
の中で何時となく気付いた  
事はこの横町の直線道路と  
神社境内の参道との接続点  
(境内入口)で道路の中心が  
一・五米もずれがあること  
に気付いたのである。この  
横町通りが、真実に参道と  
して造られたのであったと  
したらこの様な事はないは  
ずであらう。

ところで、ここにきて更  
に気付いたことは、一・五  
メートル西へずれた横町通  
りのセンターラインと社地

入口の民地との境界線とが  
ピタリと一線になっていた  
事である。横町通りのセン  
ターラインが社地の境界線  
と合致しているのは単なる  
偶然であったのだろうか？

神社周辺の見取り図を見  
れば分かる様に、神社の社  
地とその西隣の鴨ノ宮駅に  
通じる道路に囲まれた一画  
の民地を見比べるとその広  
さ、地形は大差がなく又、  
実際に入口に立って見ると  
その全体は、入口の地面よ  
り一・五メートルも高くや  
や台地状になっていること  
にも気付くのである。

社地西隣の一画をこの様  
に見ると、ここにも神社と  
並んだ何かがあったのでは  
ないかと思えてくる。もし  
ここに福田寺があったとし  
たらと考えると、これで  
神社入口の謎が一挙に解  
けるのではなからうか。

すなわち横町通りがここ  
で、二つに分かれ右側は社  
地の参道になり、左側半分  
が福田寺の山門に向かって  
いたと想定すれば辻褄が合  
う。この様な参道の造り具  
合から考えてみると、平安  
末期の鳥羽上皇の頃に創ら  
れたと見られるこの駒形社  
(酒匂神社)とそれにならん

で存在した福田寺の二者は、  
恐らく同時期に創られたも  
のではなからうか。

さて、これといって確か  
な物的証拠もないにも拘ら  
ず稚拙な推理を乱発し、長々  
ととりとめのない事を書い  
たが、果たしてどこ迄真実  
に迫り得たであらうか。

最後に一つ書き加えたい  
事は神社入口を東から西へ  
幅二メートル程の水のきれ  
いな小川があり、昭和初期  
頃迄は近隣の人々はここを  
昔から洗濯や農具等の洗場  
としていたのだった。

この洗場の脇に小さな橋  
があり鴨ノ宮へ通じていた。  
この橋名を福石橋と呼んで  
いたことと、この洗場に直  
径一、五メートル、厚さ三  
十センチ程、丸型で偏平な  
大石があり洗濯などに利用  
されていたらしい(現在は  
酒匂神社々殿の側に置かれて  
いる)この大石を福石と人々  
は呼んでいた。

この二つの呼名が八百年  
前の福田寺との関わりから  
生まれたものであったのか  
わからないが、一寸気にか  
かる存在である。

## 川 柳

高井喜雄

マツタケのことに触れずにキノコ飯

行き飽きた所に決まる社の旅行

祝辞にはいつも明るいうそがあり

# 古文書講座 2

## 婿入りにつき寺送り証文

内田 清

### 寺送り証文と寺請け証文

深良村の忠蔵が茶畑村へ婿入りした事にもなう公文書の一つです。前回は村から村へという村送り証文でしたが、今回は「寺から寺へ送りました」という、小田原藩寺社奉行宛ての報告書ですから、正確には寺送り報告証文です。

当時、婚姻に当たって、寺が作る証文は更に二種類ありました。本国寺から耕月寺への寺送り証文と、耕月寺から寺社奉行宛ての請け入れ願書です。

このように手続きが厳重なのは、キリシタン禁止との関連で、寺請制度が徹底していたからです。神官でさえ寺に属していません。

### 深良村と小田原藩

忠蔵が婿入りした茶畑村は、現在の裾野市ですが、当時は大久保加賀守の領分

(小田原藩領)でした。ところが彼が育った深良村は、旗本稲葉金之丞の知行所です。深良は、御存知の箱根(深良)用水を開いた大場源之丞の村です。寛文十年(一七〇〇)には稲葉正則の領分(小田原藩)でしたが、稲葉氏は藩領・旗本領の入り組んだ用水利用二九か村の要となる深良村を分家の領地として引き続き支配していたようです。

### 貴重な襦の下張り文書

この文書には、縦横に汚れた線が入っています。これは襦の下張りで骨に糊付けされていた跡です。文書の伝来は、次のようになっています。寺社奉行所から経師屋が反古紙として払下げを受けて襦にしました。百五十年ほどして西大井の小屋をかりた常盤蒼生子さんが、焼かれる寸前の襦を剥がして発見し、八九点

を小田原市郷土文化館へ寄贈された中の一点です。

ほかに温泉や酒匂川の歴史を語ってくれる史料があるので感謝しています。読者の皆さんにも、常盤さんのような眼をもって下さるようお願い致します。

注意して欲しい語句

檀那・旦那

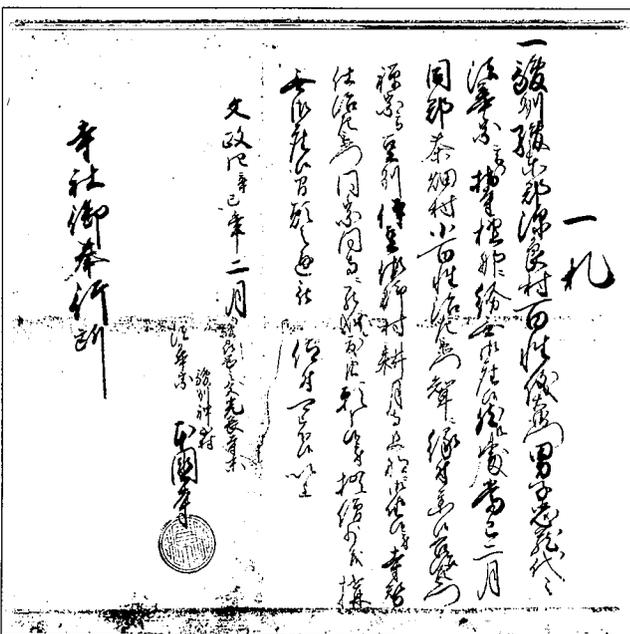
檀那・旦那 だんな。本来は布施の意であるが、江戸時代には檀越と同義語、寺の施主や檀家の呼称とした。幕府の寺請制度によって、寺は檀那の身分保証・葬祭を行う代わりに費用の一切を檀那に負担させることになった。

聲三縁付参候

むこにえんづきまいらさうろう。ムコに行きました。聲は婿の俗字。参候は、来候、相成候と紛らわしいので文脈で解説する。

久政巳年

辛巳 かのとみ、しんし。干支は年代確定の優れた資



一 駿州駿東郡深良村百姓、儀右衛門男子忠蔵、代々法華宗ニ而拙寺檀那ニ紛無御座候。然ル処己巳二月、同郡茶畑村小百姓治左衛門聲三縁付参候。右治左衛門、禪宗ニ而豆州伊豆佐野村耕月寺旦那ニ御座候ニ付、寺替仕、治左衛門同宗同寺ニ罷成度由願申候ニ付、拙僧少茂構

無御座候間、願之通被仰付可レ被下候。以上、文政四辛己年二月 駿州岡之宮光長寺末 駿州神山村(御殿場市) 法華宗 本国寺 印

寺社御奉行所

料で横並び、縦並び、違い並びで時代判定にも役立つ。巳は、巳いのみ、己ぎ。

# 大井龍跳 (自習学校 創立者)

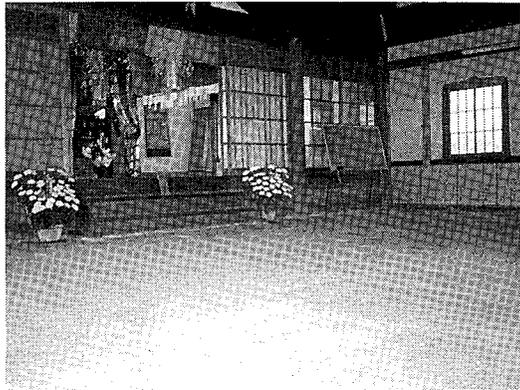
## にまつわる逸話

西山銈太郎

### 一 土下座

『小田原史談』に「自習学校創立考大井龍跳」を寄稿したが、同誌第一四六号に掲載されたので、御教示を頂いた第八回生小八幡の譲原義守氏を尋ねて、自習学校の思い出等話した。学校経営の苦心談になると、大井龍跳は直接県へ出て向いて県の役人に訴えた。

### 瑞雲寺本堂



翌日大井校長は、生徒の前で県庁での結果を縷々説明し「立派な青年を社会へ送り出して真価を認めて貰おう。君達しっかり勉強して呉れ給え。頼むから立派な青年になつて呉れ給え」と両手・両膝を地について頼まれた。

「先生のその時の真剣な顔は今なお忘れられない。我々も必らずしっかり勉強しなければならぬとかく心に誓った」と譲原氏は遠い昔の事を

昨日の如くに語って呉れた。平成四年二月十一日、自習学校々友会総会に於ける会長の挨拶に、右の事柄だけを述べ、出席の會員に深い感銘を与えた。

### 二本 堂

大正十二年九月の大震災で倒壊した瑞雲寺本堂は、以前に増して豪壮に建てられた。建坪は百坪、その内、前側は百畳程のコンクリートの土間に作られた。これについて第十七回生曾我岸乙部敏雄氏は云う、大井龍跳は「現在は総て制限選挙であるが、将来は必ず普通選挙になって、日本人なら誰でも選挙権がある様になる。そうなった場合選挙演説会場が沢山必要になる。今日の様ではその会場に困るであろう」との考えがあった。当時は各地区の公民館は勿論、田舎に於いては講堂さえない小学校が多い時代だった。

瑞雲寺では震災後は葬式を初め、その他の儀式・行事等総て此の土間で、全員椅子にかけて楽々と行われて居る。

### 三 うちの子供

大井龍跳は生徒の事を公式の場合以外は生徒と云わず「うちの子供」と云った。大井龍跳の子息大井重忠氏は語った。ある会談の節相手の人が「大井さん、貴方は子供さんは幾人ですか」と尋ねた。一寸親しくなると尋ねた。一寸程出る話題である。大井龍跳は何時もの如く「わしんとこの子供は三百何十人ですよ」といともあっさり答えた。相手は「エーッ？」と驚いてしまった。よくよく質したら自習学校に在学中の生徒だと分った。

### 四 山上総長

大井龍跳は衷心から生徒を自分の子供だと思つた。大井重忠氏は戦争中駒沢大学に学んだ。或る日突然「総長室へ直ちに来る様に」との連絡があった。重忠氏は何か悪い事でもしてしまつて、叱られるのではあるまいかと恐る恐る、だが元気よく「総長先生のお呼びで大井参りました」と云った。総長は「マアそうかしこまるな、そこへかけろ」と云つたので少々気持の安まる思いだった。秘書が茶菓を支度しようとすると言しいと

云つて総長自ら準備をし「君の親父の龍跳君はどうしている？ わしと龍跳君は若い頃一緒に炊事をし、一つ釜の飯を食べ、同じ徳利の酒を飲んだものだよ」と云つた。重忠氏は父親の現況を種々説明した。話しながらもテーブルの上の茶菓が気になって仕方がなかったが、食べた時の味は又忘れられないと云つた。

総長は九州の産、山上曹源師であった。山上総長は如何にも九州男児らしく「葉隠」の熱心な遵奉者で、自ら教壇に立つてその講義をした。剛腹小事に拘泥せず、磊落で酒を好み、大井龍跳とはよく気の合った仲間だった。

### 五 佐藤中将

山上曹源師は九州に於ける一山の住職だったので、故郷の檀家からの度々の要請で後に九州へ帰つた。瑞雲寺に院殿大居士の墓碑が一基ある。太平洋戦争末期に戦死せる海軍中将佐藤源蔵氏である。佐藤氏は当時の足柄上郡曾我村鬼柳の出身で、大井龍跳が曾我小学校を退職した後檀家の希望者が英語・数学・漢文

等を習いに来た。檀家ではないがその中に居た一人だった。

佐藤少年は大井龍跳の手柄にいたくひかれ、大井龍跳もその少年が非凡な人物である事を見ぬいて注目して居た。やがて海軍々々を志し兵学校に入った。大井

龍跳を崇拜する心は愈々固くなった。大井龍跳を只の師として教導を受けるだけでは満足せず、実の親として仰ぎ度く望み、許されてその長女を妻に迎えた。後にはよく海軍記念日等には自修学校へ来て日本海海戦の講話をした。筆者も大正

十五年二年生の時に聞いた一人であった。昭和十五年二月十八日(日)には自修学校では父兄会が行われた。その終了後海軍少将佐藤源藏氏は、重大時局を迎えての国民の覚悟に就いて講演を行った。

太平洋戦争が重大な段階

を迎えている頃、海軍中将佐藤源藏氏は世田谷の自宅から海軍省へ通っていた。昭和十八年の寒い頃大井龍跳宅へ母と共に上京せられ度旨連絡があった。当時大井重忠氏は駒沢大学在学中で実姉である佐藤家に下宿していた。久々の岳父一家

をまじえての佐藤家の夕食は賑わった。特別の用事がある訳ではなく、何時もと変わらぬ団欒を楽しんだ。

翌朝は珍しい大雪で海軍の短靴では歩けない。重忠氏は「兄さん長靴をはいて行きなさいよ。僕が短靴を持って駅迄送って行きますから」「そうかそれは有り難い、ではそうして呉れ」と云って大変喜んだ。別れの挨拶を述べ、二人肩を並べて行く佐藤氏の後姿を見送って、大井龍跳夫妻はフト何とはなしに一抹の不吉を感じた。

# 丹沢の植物

⑬

## 城川四郎

秋田県白神山しろやま地のブナ林の保護がマスコミに大々的に取り上げられて、一般人たちにはあまり関心のなかったブナという植物が、近年は自然保護のシンボルともいえるほどに脚光を浴びてきた。植物社会では温帯のことをブナ帯というほ

どにブナは温帯の代表植物である。神奈川県ではほぼ千米以上の山地に生え、丹沢・箱根に分布する。特に丹沢のブナ林は学術的にも貴重とされ、丹沢の植物の主役でさえある。ブナの大木がたくましい枝を張って堂々と大地に立つ姿は人々

の感動を誘うものがある。太平洋側のブナは東北地方や日本海側のブナに比べ正常に発育した葉の大きさにかなりの差があるので日本海側ブナをオオバブナ、太平洋側ブナをコハブナと呼び分類学的に同一種類としては扱えないとする見解がある。図は丹沢のブナと秋田駒ヶ岳のブナの葉を比較して書いてある。

丹沢でも最も素晴らしいかた檜洞丸山頂のブナ林が本来の姿を失ってしまったのはたいへん淋しい。丹沢のブナ林には二つの異なった生態がある。一つは山の傾斜が急で雨水がすぐに流れ下る乾いた環境で、スズタケの群落を下層に伴っている乾性ブナ林であり、他は山頂部などに見られる平坦または傾斜が緩く雨水が停滞する環境で、スズタケを伴わずバイケイソウなどの大型草木が林床に生える湿性ブナ林である。日本のブナ林は林床にササを伴っているというのが特徴とされているのに、丹沢にはササを伴わない湿性ブナ林が発達しているという点で貴重とされた。しかし、今、枯れが目立つのはその湿性ブナ林なのである。

佐藤源藏氏は常々海軍を退職したら岳父の自修学校を手伝うのだと云っていた。大井龍跳もそれを望み、その事に強く期待していた。又世間一般からもそうなる事は当然の帰結だと思われていた。然し多くの人々の期待は裏切られ、訪れた便りは「昭和十九年四月十四日海軍中将佐藤源藏戦死」だった。

ブナ (ぶな科)  
Fagus crenata Blume



著者原図

ところが近年、その丹沢のブナが檜洞丸・蛭ヶ岳・丹沢山などの山頂部では、まだ解明できない理由によって枯れはじめているのである。丹沢を含め太平洋側のブナ林は東北地方や日本海側のブナ林と違って活力に乏しく芽生えや稚樹が少ないから、再びブナ林が形成される可能性はほとんどないと思われだけに憂慮される事態となっている。

大井龍跳は片腕をながれ、更に大地へ強く叩きつけられた如くに感じ、夜は人知れず夜具の襟をぬらした。

# 三月十日東京大空襲

## を顧みて(一)

まつもと たつみ  
松本 巽

### 召集を受け 防空部隊に入隊

昭和十八年六月十日、私は、教育召集を受け、千葉県我孫子にある東部第七十七部隊に入隊した。

この部隊の固有名は分からないが、防空部隊で高射砲隊と高射機関銃隊から成っていた。

入隊した翌日、教育召集は、臨時召集に切替えられた。本来、教育召集は、平時において在営三ヵ月程度の軍事教育を受け、有事の際に召集され軍務に服するものであるが、当時、大量の召集のある場合に、軍の作戦を敵のスパイに気づかれぬようにと、教育召集後臨時召集に変えるという方法が採られていた、と聞く。

入隊三日後の六月十三日になると、一緒に入隊した私達初年兵十三名は山口准

尉に引率され、我孫子駅から列車に乗ったが、行先は秘密にされていて分からなかった。東京駅で乗り換え、下車したのは、千葉県市川駅。行く先は国府台の高射砲隊であった。

後で分かったことであるが我々を引率の山口准尉は、砲兵科出身の予備役で、召集前は軍需工場の守衛を勤めていたという。年格好は四十代半ば頃と思われた。

その頃、日本本土を敵の空襲から護るため、高射砲部隊の配置強化が急務となっていた。

緒戦の勝利で日本は、東南アジア一带を軍事的占領に成功したが、アメリカ軍の反攻もかなり早い時期に始まった。国民の前に具体的にその行動を示したのは、開戦から四ヵ月後の昭和十七年(五三)四月十八日のことである。日本本土に接

近した米航空母艦より発進のB25爆撃機により本土が初空襲(東京・横浜・名古屋・神戸)された。

将來、戦争が続けられ、制空権、制海権を取られた時、日本本土は全土に亘り大空襲を受けるであろうと、軍の首脳は思ったのであろう。事実、六月始めにミッドウェー海戦があり、日本海軍は死力を尽くして攻撃をするが、虎の子の航空母艦四隻、重巡洋艦が撃沈され、航空機三百余機を失うという損害を受け、以後戦局は、日本に日に日に不利に追い込まれることになった。しかしこの事実は、国民には知らされなかった。

八月になると、ソロモン諸島での戦闘が激しくなり、翌十八年二月、日本軍はガダルカナル島から撤退、軍は転進という表現で、国民に発表した。四月十八日には、山本五十六連合艦隊司令長官の乗った飛行機が撃墜され戦死。さらに五月二十九日、アッツ島玉砕、二千五百人の守備隊が全滅という破目に陥った。

このような、日本にとって次第に不利となっていく戦況下、召集を受けたの

である。

### 入隊三日後転属

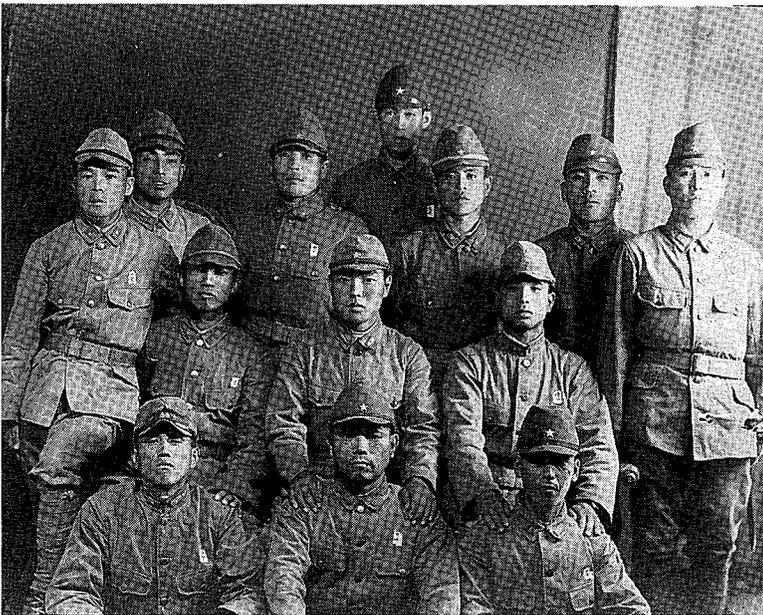
入隊後三日目の転属先は独立高射砲第一大隊、通称東部第一九九三部隊で、国府台にあって京浜要地の防空の任務を担うもので、私は第四中隊第六分隊に配属された。

### 高射砲隊入隊当時の同年兵

二列中央分隊長(中鉢重曹) 右側筆者

は、田園の中にあつた。急造されたもので、バラック建ての兵舎と共に板囲いで仕切られた約五十アールの広さがあり、野戦高射砲が六門据えられていた。陣地の廻りでは、毎日、相当年輩の農民が野良作業をしていた。

私達初年兵は、この部隊で毎日、高射砲操作の訓練



を受け、夜は学科として、「軍人勅諭」及び「戦陣訓」並びに高射砲の「射撃教範」の教育を受けた。

当時日本軍には高射砲兵部隊は少なかったため、隊の編成は、中隊長以下将校、下士官、兵までほとんどが重砲、野砲、山砲等の現役を修了した砲兵科の出身者で、高射砲の現役出身者は、中隊に五、六名の兵と二名の下士官にすぎなかった。

軍隊手帳 記載事項の一部

以上述ぶる所は、悉く勅諭に發し、又之に歸するものなり。されば之を戦陣道義の實踐に資し、以て聖諭服行の完璧を期せざるべからず。戦陣の將兵、須く此の趣旨を體し、愈々奉公の至誠を擧げて、克く軍人の本分を完うして、皇恩の渥きに答へ奉るべし。

管所 東本師管橋歩隊		種兵 防本軍高射兵	業特 高射	職務 高射	服装 待衣	容 帽	番号 番外	分 文	身長	名	氏	所	住	籍	本	職等官	兵隊
神奈川縣足柄下郡片浦村		米神	四四七番地	上野	大正六年十一月十三日生	米	種	米	種	米	種	米	種	米	種	米	種

私達は高射砲現役の古年兵より教育を受けた。野戦高射砲は、戦地では自動車によって繋引され、陣地を敷くとき車より離し脚を開いて布設するのであるが、私達の陣地は固定してあった。

しかし訓練は、何時戦地に出動する兵があるか分からないので、布設訓練も行った。野戦高射砲は、一門一箇分隊十二名の砲手、照準手

の連繫動作により発射されるので、精密な操作が求められた。弾丸込めの砲手を除いて、十一名がその操作が一致しないと発射が出来ない。

照準手は二名で、それぞれが照準眼鏡を手にして、攻撃してくる敵機を視野に入れ、一名は方向を、一名は高低を追跡するのである。私は高度を測る照準手で倍率約三倍程度の照準眼鏡を手にして、眼鏡内に表示される十の中心点に敵機のプロペラ部分を交叉させるように追跡し、瞬時、眼鏡内に示された高度を読みとり、大声で報告する役割が与えられていた。

東京湾埋立地に移駐

入隊して二カ月半ほどたつて、部隊は国府台より東京に移駐した。私が持っている「軍隊手帳」には、次のような記述がある。

○昭和十八年六月三日東防旅作命甲第一八三號ニ據り同年八月二十七日防空第五聯隊長ノ指揮ヲ脱シ同地ヲ出発○同日東京第十號陣地ニ推進本屬ノ指揮ニ復歸ス○尔後同地

ニ在リテ前任務続行

移駐先の陣地は、東京湾月島沖の十号埋立地で、江戸時代末品川沖に構築されたお台場の北側にあった。第十号陣地は、来襲が予想される米空軍B29大型爆撃機を迎え撃つために開発された、新鋭の九九式高射砲が布設されることになったが、砲はまだ据えられず、台座が出来上がっているだけだった。

台座は、各中隊六門宛計二十四箇所あった。陣地は、周囲十位位の広さで、埋立したばかりで草もあまり生えておらず、土は軟かかった。九九式高射砲が到着するまで従来の野戦高射砲を仮設し、訓練は続けられる事になったが、高射砲の繋引車がキャタピラでなく、普通のタイヤのためスリップしてなかなか進まなかった。

夜間は、星を目標とした演習も行われた。なお、陣地の前面には、照射隊が配置され、小さな木造船に照射機一門を据え、分隊長以下十何名かが乗組んでいた。照射隊は夜間襲撃してくる敵機を照らし出し、

高射砲隊に敵機の位置を知らせる任務をもっていた。

実弾演習のため平塚へ

召集されて以来、家に手紙を出す事が許されなかった。家では内地に居るのか、それとも外地に送られたのか、さっぱり分からなかったという。

漸く、手紙を出すことが許されたのは、入隊後三カ月経った九月、高射砲操作の基礎訓練も終り、その総仕上げの実弾演習が実施される何日前のことだった。演習は、湘南海岸の実弾演習陣地で行われ、列車で平塚まで行く事になる。下車すると、駅で暫く休憩が与えられることが分かった。

あるいは、手紙を出すことが許されたのも、その機会を利用して家族に会えという上官の親心だったのかも知れない。

私は、当時平塚の鉄道官舎に住んでいられた、菅沼さんの所で、初めて両親と面会することが出来た。話は軍事上の秘密は敵に守るよう命令されているので大まかな事しか話すことができなかった。なお、菅沼さんは、私と

同じ米神の出身で、広作さん(故人)、浩一君の父君である。

実弾演習陣地は、平塚の現在湘南道路北側の砂地にあった。演習は、陣地の傍にある兵舎に宿泊した、二日間の訓練であった。

標的は、飛行機が撃引する、機体より三百メートル離れた吹き流しであった。

実弾発射は始めてなので、どの位の大きな音がするか心配だった。

砲手は、耳の鼓膜が破れるのを防ぐため、音に馴れる迄耳栓を義務づけられていたが、地軸を揺り動かすような轟音には、やはりびっくりさせられた。誤って弾丸が飛行機に命中しないかという気遣いは無用だった。

また、発射と同時に砲の振動を防ぐため、砲身がメートル位下がる構造になっていたが、高射砲は、他の砲と違い、四十五度以上の角度で発射するので振動が激しかった。照準手は、台に腰掛け眼鏡で見ているため、体が浮き上がって、眼鏡から目が離れ、再び目標を眼鏡に入れるのに苦労し

た。馴れてくるに従い、音に驚かなくなったのは勿論であるが、振動があっても目を眼鏡より離さないよう工夫していた。

六ヵ月ぶりの外泊

昭和十八年十二月十七日

初めての外泊が許可された。二泊である。この日を覚えているのは、小田原市飯泉観音の縁日だったからだ。家族と一緒に寝起きしたのは六ヵ月ぶり、畳の上の暮しや蒲団で寝るのも気持ちよいものだ。また、うまい米神の水を飲んだ時の気持は忘れられなかった。

それに、母が造ってくれた砂糖入りの甘い大福餅のおいしかった事は今でも思い出す。当時、砂糖は一般家庭では中々手に入らなかった。家にあつたのは弟が二十五㎏入りを一袋担いできたからであった。

弟は、北支に出征していたが、転属して戦船兵となり、広島・台湾間の輸送船に乗組んでいた。台湾へは陣地構築のためセメントを積んで行き、台湾からは砂糖を積んで来た。そんな経緯から家に砂糖があつた訳で、帰隊する時、大福餅と

砂糖を持って行き、戦友に分けてやって大いに喜ばれました。

なお外泊は、昭和十九年(九四)十一月初めてB29爆撃機の空襲がある迄、順番に三ヵ月一度許された。

天皇陛下下幸のため

相模原練兵場へ

昭和十九年四月二十日、天皇陛下は座間の陸軍士官学校に行幸された。この日の「軍隊手牒」には、

天皇陛下陸軍士官学校行幸に方り、行幸□観兵式及陸軍士官学校ノ直接掩護ノタメ相模原練兵場ニ派遣○同日歸隊

とある。

丁度前日雨だったため、練兵場に入る五百メートル前の道路が泥まみれで、自動車のスリップするので、兵全員で、高射砲を撃引してきた自動車より離して、練兵場に押し運んだ。陣地を敷くには、砲の脚を四方に開き鉄の杭を打ち、土壕を造って乗せ固定するのであるが、練兵場のため土が堅くなってしまつていて杭がなかなか入らず苦労を

した。辛い空襲もなく無事任務を終え、十号陣地に帰つたのは夕方のことだった。(続)

軍隊手牒

旧陸(海)軍の下士官・兵

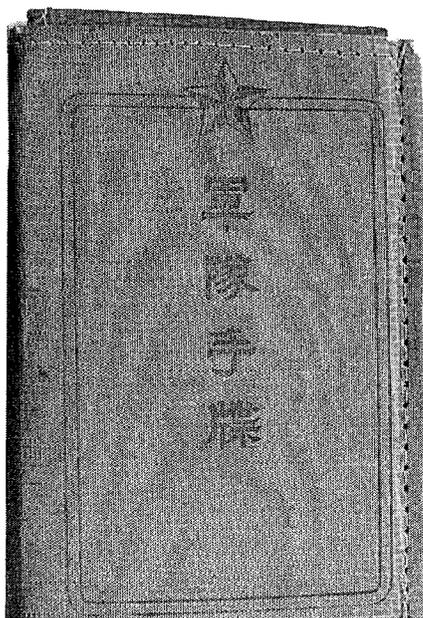
に与えられた手帳。陸軍の例では、本籍、氏名、生年月日、所属部隊名、兵種、階級、兵歴、賞罰などを記入して身分を証明したもの。軍衣の胸の物入れ(ポケット)に収まる大きさで、縦約十二・三センチ横約八・五センチ。ページ数は軍人勅諭などを含めて三十数ページ和紙を使用。記入文字は変・退色しないように黒を用い、永年保存できるように布のカバーで包み込まれるようになっていた。

軍隊手牒は通常、下士官

兵には渡されず、下士官兵の人事事務を担当する内務係准尉(准尉がない場合は先任下士官)が中隊事務室に一括保管した。軍隊手牒へ兵歴等の記入は、准尉が携わることなく、字の達者な兵が准尉の助手として、その事務に従うのを通例とした。

軍隊手牒は、満期除隊のとき、本人に下附されたが、保管する責任を持ち、召集及び簡閲点呼の折必ず携行することを義務づけられていた。

内地で終戦をむかえ、軍隊手牒が渡された兵は「こんなもの役立つものか」と破棄した者が多かったという。戦場となった満洲では、ソ連の手に渡るのを恐れて中隊単位で焼却したと聞く。



# 古墳遍歴(七)

## 知られざる皇陵(1)

飯田 悟郎

### 神代三代

初代神武天皇に始まる御歴代百二十五代の人皇(ジンノウ)に対し、それ以前の天孫瓊瓊杵命(ニニギノミコト)からの三代を神代三代、又は神皇(シンノウ)三代と申します。

このお三方が実在されていたかどうかのヤボな議論はともかくとして、余り知られていないことなのですが、その御陵は実在します。それも正副二つづつ。

ここで正陵と言いますのは正式に宮内庁の所管下にあり、日々の祀りを絶やさず営んでいる御陵のことで、副陵とは正式には陵墓参考地と言い、同じく宮内庁が管掌しながらも管理は民間に委ね、宮内庁の係官が年に数回状況視察に訪れるところを申します。このように複数の陵墓を持つお方は、後述しますが、他にも幾つかその例が見られます。

### 天孫瓊瓊杵命は、正確にはアメニギツクニニギツアマツヒダカヒコヒコホノニギノミコトと言われます

そうで、余り長いお名前なので略してニニギノミコトとお呼びしています。その御陵(普通はこれをゴリョウと読みますが、正式にはミササギともうします)は日向可愛山陵(ヒムガノエノノミササギ)と呼ばれ、鹿児島県川内市宮内に所在する小さな丘の上のお宮の背後にあります。御陵自体は大したことはありませんが、眼下に川内川が流れ、市街が一望のもとに見渡せ、非常に眺めの良いところで、付近には薩摩国府・国分寺跡も残っています。

副陵は九州の反対側、宮崎県東臼杵郡北川町にあり、延岡市から北川という川に沿って北上し、可愛岳(エノダケ)の東麓、俄野と可愛の集落の境目のあたり、国道10号線と日豊本線が

並んで走るすぐ傍らの山手にちよこなんとうづくまるかわいい円墳がそれだそうです。神皇三代天津日高彦火火出見命(アマツヒダカヒコホデミノミコト)を祀る正陵は日向高屋山上陵(ヒムガノタカヤノヤマノエノミササギ)と呼ばれ、鹿児島県始良郡溝辺町麓にあり、鹿児島空港とは九州自動車道を挟んで反対側すぐのところ

に所在します。副陵はまた後でも出てきますが、宮崎市鶴戸の鶴戸神宮に詣でる参道の途中を左に小道をのぼる丘の上の小さな墳丘がそれだそうです。

神皇三代天津日高彦波瀲武鸕鷀草葺不合命(アマツヒダカヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト)を祀る正陵は日向吾平山上陵(ヒムガノアヒラノヤマノエノミササギ)と呼ばれ、鹿児島県肝属郡吾平町上名にあり、肝属川の支流が山裾から流れ出る山蔭の洞窟で、副陵は前記の鶴戸神宮の本殿が

それで、海蝕崖が波に深くえぐられた洞窟の奥深くに鎮座まします。

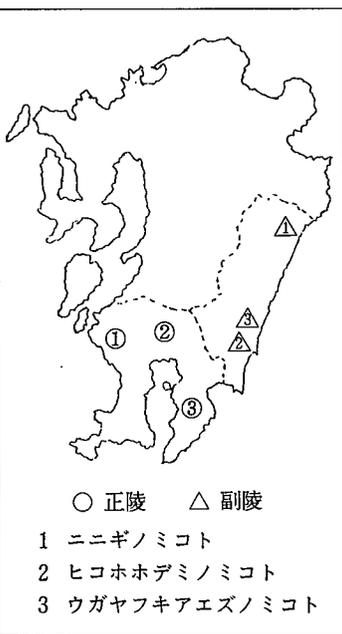
これらの御陵を訪れてみますと、各正陵・副陵間にながな一つのデジャ・ヴー(既視感)を覚えます。地形、背景、雰囲気等とにかく似ているのです。もう一つ生ずる疑問は、正陵が三つとも鹿児島県にあり、副陵が全て宮崎県にあることです。日向の国が古代には薩摩・大隅の両国を包含していたことは容認するとしても、何か不自然な作偽が感じられます。

ところで、これは此処だけのナイショの話に願いたいのですが、その昔神武天皇御東征のみぎり、日向の国の人的資源のめぼしいところをあらかたさうってゆかれたらしく、それ以来今日まで、宮崎県からはこれといった人物が出ていない、とは、お酒の席などでよくささやかれるうわさです。

また、瓊瓊杵命の副陵に詣でた際に、様子を伺いに寄った陵の傍らの家の娘さんの話ですが、「そう言えばオジイチャンが良く言っていました。本当はこちらがホンモノなのだが、御維新以来薩摩のイモめがのさばりくさって、とうとう御陵まであっちに持っていったしまいおった」と。

宮崎県がとかく陽の当たらぬところに疎外されがちであったのも、その真偽はともかくとして、話としては面白いと存じ、ご紹介しておく次第です。

何はともあれ、機会さえありましたら、一度これらの御陵巡りなど如何でしょうか。ただし、互いに相当な距離を隔て、且つまた交通も不便なところですから、自家用車又はレンタカーの利用をお勧めします。



○ 正陵 △ 副陵  
1 ニニギノミコト  
2 ヒコホホデミノミコト  
3 ウガヤフキアエズノミコト

八十七年ぶりのお礼

露国・日露の役の俘虜のこと

前編(二)

文と絵 隠岐威重

さて露国ソ連邦

老人は昭和二十年の八月の敗戦時には満州のハルビン・長春(新京)にいた。

関東軍の不様な敗走中、朝鮮・満州の境の長白山系の山中に籠り、ゲリラ戦を構えようとした軍の中に居た。そして長春(新京)で戦いは止んだ。その後無事に満州での勤務地撫順にもどり、二年間その地で抑留生活を送った。拙著『特異点』に詳かに記した通りである。

国境の地では直接ソ連軍と鉢を交えなかったが、抑留の地撫順で、ソ軍・ソ連兵の無理無体の様を嫌と云う程味わった。強制労働・強盗・暴行・強姦・無法の工場設備の持ち去り等々と。老人の勤めていた車両工場の直ぐ前の競馬場には、撫順に出来た特設師団の陸兵(その中には満鉄撫順の同

を、巨砲を作り、操り、怒濤の如く押し寄せる強兵でもあると振り返ってみみた。

ではソ連とは、露国とは何かと云う疑問が心の隅にかすかに湧き上がって来た。ソ連と露国を少し知ろうかと思っ来て来た。

だが、老人は露国史を知らぬ。歴史年表を片手に文を綴る程度にしかない浅学の徒だ。が、隣人・隣国として興味のあることも事実だ。

図書館に走り、友人の蔵書を頼り、なけなしの老後の小遣いを叩いて書店の書棚を漁って、露国への俄勉強に励んだ。そして次のことが次第に分かって来た。この国の誕生が以外に若いことを知った。

トルストイ、ドフトエフスキー、等の重厚な文学、ツルゲネーフ、チェホフ、ゴーゴリ、ゴースキー等の軽妙な文学。

老人の学生時代、この夏休みにはきつとドフトエフスキーの悪霊を読破しようと幾夏試みたことか、だが、その都度分厚いその本は昼

寝の枕に化してしまった。

でもロシア文学は大変面白いと思った。

西欧のそれとは一味違うものがあると思っった。

トルストイか、ドフトエフスキーかその小説の登場人物の顔・形を写すのに、ぎっしり詰まった文庫本の活字で二頁の間、顔のニキビの形から、鼻の曲り具合、脳味噌の皺の数まで延々と重く軽く写す。その描写力に舌を巻き、北方の種族のエネルギーに深く感じ入った。でもそう云えば、口で十九世紀のロシア文学とは云ったがその前には誰がいるのかも知らなかった。

北の人達が詩聖と崇めるプーシキン、その名は少しは知っていたが、彼の前には詩人も文学者も一人もいない国だったことは知らなかった。

プーシキンの出たのは十九世紀の始めだ。日本で云えば文化年間、將軍家斉の



時代だ。『古事記』『源氏物語』の時代には、この国には何も無い、文学の一かけらもなかった。元禄の近松物時代が過ぎてやっとこの国に文学の花が咲いたのだ。その前にはこの国では、黒貂を追ってコザックが凍りつくシベリアの大地を東進していたのだ。

ロマノフ王朝が生まれたのは十七世紀、日本で云えば江戸時代の始め、大阪落城の直前だ。

でも、このまま話しを進めては余りに粗末すぎる。露国の生い立ちも分からぬ。少し掘り下げてみよう。

世紀前四千年頃、オリエ

ント地方に青銅器文化が興る。その文化が何故か千年後にバイカル湖畔のシベリアの地に来た。世紀前五百年〜千二百年その文化は高度の冶金術に化し、その地は栄えた。

中国の北方、シベリアとの境。東にヤブロノイ・ダツルン・サヤン・アルタイ・天山(しやん)の諸々の山脈が概ね東西に走り蒙古高原をその間に創る。その山々は北極海から吹き付ける水

分を高峰に貯え、氷雪として山麓に下り潤し緑の草原を生む。その地が馬羊等の獣類を養う。そこが遊牧民族の発生の地となった。

世紀前、そのモンゴル高原に興きた匈奴(きうど)後世東方の匈奴と重ねて西方で活動したアツチュエラ大王のフン族。その遊牧地はロシア平原のドン川とヴォルガ川の流域の草原。遊牧文化の発生の地とも云われる。

五〜十一世紀、アヴァー

ル人……中国『魏書』に記される蠕蠕(じゆじゆ)とも同じ種族か。アヴァール人が匈奴が消えた蒙古高原の主になった。(世紀四〜六)その族が以後又ロシア平原に出現遊牧をした。

十二世紀末にデンギス汗が蒙古高原に現われ、その版図を東はカムチャツカ半島、カラフト西は欧州にまで広げた。

一二二七年、デンギス汗死後八年目に高原の首都カ

ラコルムに大集会を開いた。その決議によりデンギス汗の孫バトラがヴォルガ川の流域(ロシア平原)及びその西方の征服を決めた。

その頃北方の森林地帯に住む原ロシア民達は平原に出でその地をかき起し農を営み、合して集団をなし、国を創る気運になって来た。

モスクワ・キエフの都市・城塞がそれだ。

だが、東方に興ったモンゴル。その悪魔の蹄の下に、都市、城塞は一たまりもなく壊され蹂躪(じゆうりつ)され財宝は奪われ、技能を持つ工人は連れ去られ、婦女子は汚された。その怒濤の先は西欧にまで至った。が、群れの内部の事情で西欧より引いた。が、ロシア平原にはそのまま居座りキプチャック汗国(三四〜一五〇)を建て暴政の限りを尽くした。

む原住民達は農奴として、虫けら以下に扱われた。その暴政が十五世紀の初頭までその平原を覆ったのだ。日本史で云えば南北朝・足利時代だ。

三百年近くも栄えたキプチャック汗国、その末期にはヴォルガ川下流のサライにあった包(バオ)。イスラム文化を容れ、包も固定建築に変わり、水力利用の工場もでき、商工業が盛んになり、都市に発展し、あの遊牧民の盛気も衰えた。

ロシア大公イヴァン四世、後に近代化を進めたエカデリー女帝、その情人のポチョムキンにより一七八三年に、キプチャックの末裔は滅ぼされた。その残存の民は現在のウクライナ共和国クリム州の構成員だ。モンゴールとロシアの混血、ロシア正教を戴く民と、トルコ系回教徒、回教とロシア正教の争い、それが現在のロシアの苦悩の種の一つでもある。(続)

### 郷土誌目次紹介

#### ◇小田原地方史研究

小田原地方史研究会  
〒250 小田原市久野野三二  
サニータウン三三四

小俣晴俊方  
電話(四五三)五三〇  
18号 '92・5頁

#### △追悼▽内田哲夫氏

宇佐美ミサ子  
故内田哲夫氏『小田原地方史研究』掲載論考並びに解題

△追悼文▽  
内田哲夫君一研究会創立のころー 福田以久生

中学生でもできる市史資料編への執念 内田 清

#### △論文▽

助郷紛争の展開―「相助馬」役をめぐって 宇佐美ミサ子

唐津藩に入府した大久保忠職・忠朝の藩政支配の一断面 ①地方知行より蔵米知行へ ②移り庄屋の問題 ③研究ノート▽

統後における軍人援護―小田原統後奉公会の活動― 井上 弘

△資料紹介▽  
永勝寺所蔵北條氏直感状

山口 博

#### △図書紹介▽

伊藤寿郎著『ひらけ博物館』 小俣晴俊

◇立木望隆主宰 郷土誌 芹間乃道

小田原市久野(五九)番地 郷土文化研究会発行 電話(四五三)三三三

第四十一号 平成四年 六月発行

今昔武家屋敷のころ 城前本 曾我兄弟物語 (事件の発端) 立木望隆 文字瓦から見た千代庵寺考 内田盛雄

北条氏康婦人瑞溪院(座談会) ゆうすけ君の郷土史(富先生)

「タタールの頸木」と云われた酷政、暴力支配が三百年に亘った。その地に住

お念仏 木村 博  
郷土俳壇と奥の細道の芭蕉の句  
立木主宰の受賞を祝う会



# 材木屋綺談 その八

## たかた・きくせん

今ではすべての商品に定価がつけられてい  
るが、昔の商売に  
は駆け引きが多く  
お客さんには判ら  
ない暗号符課で、  
自分だけに判る原  
価を商品に記した  
ものである。個人  
だけでなく同業者

同志に通用する符課も多く使用された。例えば青果商の場合は次のようである。  
一「ちょう」二「ぶり」三「きり」四「だり」五「めの字」六「ろんじ」七「せいなん」八「ばんじ」九「がけ」  
素人が読んでも何のことか判らない。この符課は今でも使われていると言う。材木屋業者に  
も次のような符課が使用された。しかも全国共通である。  
一「本」二「ろ」三「つ」四「そ」五「れ」六「た」

**商売の暗号 符課のはなし**

「今夜の会費はほんろだ」とよは今夜の会費は一万二千円と言うことである。この符課の語源は誰も知らない。先祖代々からのもの

「ね」六「い」七「り」八「く」九「る」これを続けて読むと「たからふねいくる」となる。欲の深い話だ。あるとき他店の友人の店の符課を見てこっそり訊

「君のところのこの符課はどういう風になっているんだ」とすると「おたからのいりふね」だと教えてくれた。なんのことはない、我が店とおなじように「欲の深い商人根性」だと思わずふき出したものである。しかしこの符課によって客との対話がスムーズに進むことも符課の効用だと今でも思っている。以上公明正大?の今の世には縁のない昔話である。

(続)

## 新刊紹介

庶民の戦争体験を後世に語り継いでいこうと、小・中学の先生方が最初三人で始めたのが、一九五五年(昭和五十四年)という。

そして翌年六月から戦争体験の手記や聞き書きを載せた、『戦争と民衆』という小冊子を年二〜三回発行して、小田原市内の書店などを通じて無料配布されてきた。

発行を続けて十三年目の今年第二十八号の分迄を再編集されたのが本書で、次のような項目でまとめられている。

- わたしの戦争体験
  - 1 小田原にも空襲があった
  - 2 兵士として戦場へ
  - 3 銃後のくらし
  - 4 戦時下の教師と子どもたち
  - 5 箱根・小田原と外国人
- 戦争を知らない世代が戦



同時に、数多くの内容をまとめられたのも、息ながく年月を積み重ねた結果で、短期間に一挙に行うのは難しい仕事と思われる。

- 座談会 戦争を考える
- 『戦争と民衆』13年の記録 活動のあゆみ
- 『戦争と民衆』に思う

その歳月の経過、それは生徒・児童を教える傍らの仕事のためであつたらう。

### 会員計報

加藤誠夫氏  
(南足柄史談会名誉会長  
南足柄市関本七五―三)  
本年八月十二日逝去されました。享年八十歳  
御冥福をお祈りします。

ともかく一冊の本に仕上げられる迄には相当のお骨折があつたと思われる。編集 戦時下の小田原地方を記録する会  
発行 夢工房(秦野市)  
A判 三三頁 価千四百円

## 紅蓮洞・坂本易徳 ⑪

岡部 忠 夫

明治二十三年(八六)一

月、慶応義塾は、修業年限三年の大学部を充足させ、文学・理財・法律の三科を置いた。私立大学最初の総合大学としての栄与を担うことになる。

易徳は設置早々の文学科に入学した。その動機は、リベラル・エジュケーションを受けるためであった。この事は、ちよつと前号で触れたが。

リベラル・エジュケーションという「自由教育」という訳が一般的であると思われるが、念のためリベラルという語を辞書(講談社英和辞典)で引いてみた。

「自由主義の」「自由主義者」の外に「寛大な」「大まかな」「おおよくな」といった数多くの訳があるのを改めて思い知らされた。

中学時代一応目を通した筈なのに、すっかり記憶から遠ざかってしまっていて、新たな訳語に接する思いだっ

た。

訳語には更に関心がそられるものが三つあった。

その一つは、

自由人(紳士)にふさわしい、(職業的に対し)教養的な

とあり、続いて「リベラル・エジュケーション」の語を挙げ「高等普通教育」という訳語が準備されているのではないか!

二つ目は、

「リベラル・アート」

(現代の大学の)教養

科目(人文学・社会科学)

学・語学などの諸学

科。(中世の)学芸

(文法・論理学・修辞

学・算術・幾何学・音

楽・天文学の七科)

と、西欧の自由教育が背

負った歴史の変遷が記され

ている点である。

最後にはリベラルを「進

歩的」と訳して

因習にしばられない。

新しいものに対し偏見

にとられず自由な考  
え方をするという点で  
進歩的

という解釈が加えられて  
いる点である。

以上三つの訳語を併せて  
見ると、自由教育の輪郭が  
浮かびあがってくる。

本来自由教育は、職業教  
育ないし技能教育を排除し  
た内容のものであった。

古代ギリシアでは、自由  
教育は自由人にふさわしい  
教育を意味し、職業教育は  
奴隷に対して技能訓練を施  
すものとされてきた。

自由人にふさわしい教育  
は、イギリスに受け継がれ  
ると紳士にふさわしい教育  
となった。

勿論現在では、自由教育  
は変容しつつも生き、そ  
の理念は、普通教育として  
職業教育の深化した専門教  
育と共に人間形成に欠くこ  
との出来ないものとされ、  
またややもすると、獨創性  
を失いかねない画一的教育  
に相對する概念として自由  
教育は生きている。

ところで、易徳は自由教  
育という適訳があるのに、  
リベラル・エジュケーション  
と勿体振ったように原語  
を使ったのであろうか：ひ

けらかした訳でなかるうに。

それも、易徳が慶応義塾  
大学部に入学した明治二十  
三年(八六)は、「教育勅  
語」が公布された年で、十  
年代の自由民権運動の盛り  
上りに連動する自由教育論  
は、すっかり影を潜めてし  
まっていた事を念頭に置か  
なければなるまい。

中村光夫氏は明治十年代  
が疾風怒濤の時代とすれば、  
二十年代は統制と安定の時  
期(明治文学史)であると  
述べられているが、成程な  
と、思われる表現でもある。

教育の在り方についても  
文明開化の洋学推進派と復  
古の儒教主義教育派の間に  
激しい論争が行われ、めま  
ぐるしい程の変転がある。

それは試行錯誤の連続でも  
あった。

明治十二年(八六)九月、  
フランスの制度に倣った明  
治五年八月の「学制」がわ  
が国の実情に合わないと思  
止され、新しく「教育令」  
が公布を目前に控えてのこ  
とである。

明治天皇は侍講元田永孚  
を通じて「教学聖旨」を示  
された。孔子の思想を元と  
した儒学的徳育の強化を促  
す内容のものであった。こ

れに対し、当時参議兼内務

卿の伊藤博文は、「教育議」  
を天皇に提出し、「教学聖  
旨」に批判を加えたのであ  
る。聖旨は元田永孚が起草  
したものであっても、「お  
天子様」のお言葉に楯つい  
たことになる。

それは、元田を西欧事情  
を知らぬ頑迷固陋の儒学者  
の主張であると思えたか、ま  
た、維新の修羅場を潜り技  
け、新政府樹立のため骨折  
て来たという、博文の自負  
心が、聖旨に口を差し挟ま  
したのか興味深い事だ。

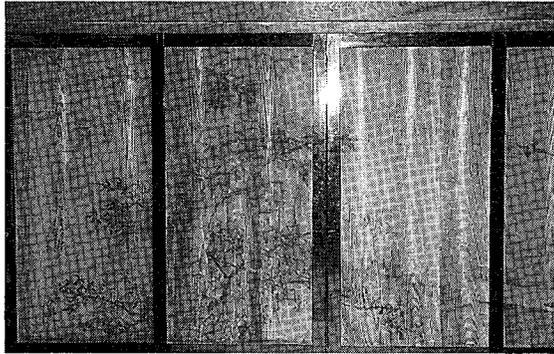
それにしても聖旨は、発  
布を寸前にした「教育令」  
を押し止めるには至らなかつ  
たが国の教育政策の起点と  
なったことは否めない。

ところで、その「教育令」  
は、小学校教育を主眼とし、  
地方官の権限を押さえた、  
地方分権的な内容を盛り込  
んだもので、地域住民の自  
発性を呼び起す事をねらつ  
たものであった。

例えば、住民が公選する  
学務委員を置いて教育行政  
を担当させるとか、公立学  
校の教則編成権を学務委員  
や教員に与えている。また、  
私立学校の設立や教則は、  
地方官への届出制にするな

山水の国(杉戸)明治38年  
丸山垣穂画(小田原市前川 長泉寺)

丸山垣穂は北村透谷の実弟。明治6年(1873)5月生れ。透谷より5歳年下。12年6歳のとき元藩士丸山良伯の絶家をつぐ。古香と号した日本画家。透谷ほど盛名は得られなかった。昭和3年(1928)没。なお長泉寺は、明治26年(1893)8月~12月まで透谷がその一室を借りて執筆活動をした処でもある。



ど保護教育政策をとった。このアメリカ流の制度の導入は、見方によっては、当時貧弱であった国の財政に見合う、手間ひまのかからぬ教育政策であったともいえようか…。

この「教育令」を推進した田中不二麻呂をバックアップした伊藤博文には、折から高まりつつある自由民権運動を念頭に入れての政策展開であったかも知れない。自由教育政策をとる伊藤や田中らと自由民権派との間には、基本的な見方考え方に違いがあったといわれているが、民権派は一応、「教育令」を自由教育令と

して歓迎したのである。ところが、政府は「教育令」公布三ヵ月後の十二月頃から、徐々に教育統制を加えつつあった。それが一般の眼にはつきりした形で捉えられるようになったのは、翌十三年(一九〇二)二月末以降のことである。

まず、教育行政に全く経験のない司法畑出身の河野敏謙が文部卿就任。続いて、明治二年(一八六九)来、文教行政に携わってきた文部大輔田中不二麻呂の更迭がある。

当時、この人事について『東京日日新聞』は、「…蓋

シ報導ノ錯置(誤報)ニ非ザル乎疑ハシニ至レル」と間接的な批評を加えている。田中は、「教育令」実施による学事停滞と、その欧化主義教育展開の責を負わされたのである。

しかし、面白いことに更迭は、形の上では左遷ではなしに、司法卿として昇任している。その措置は、伊藤博文が働きかけたかどうか知る由もないが…。

続いて四月になると、政府は太政官布告で『集会条例』を発布。その第七条で、官公私立各学校教員・生徒の政治的集会への参加及び政治団体への加入を禁止した。教師・生徒は自由民権運動へ参加できなくなったのである。

さらに五月に入ると、文部省は、小学校教科書の調査に着手、その適否を鑑別し、九月迄には、四十余种を不適当なものとして使用を禁止した。

自由民権運動の理詰りのダーの植木枝盛は、自ら主宰する雑誌『愛国新誌』に「教育ハ自由ナラサルヘカラス」と、自由教育論を展開したのは、この年の十月のことである。

文部省は、自由教育論など雑音としか受取らなかつたであろう、十二月中旬に入ると、府県に対して、「國安ヲ妨害シ風俗ヲ紊乱スルカ如キ事項ヲ記載セル書籍」は教科書に採用しないよう指示した。

自由民権を謳った書物が排除された事は言う迄もないが、福澤諭吉の著訳書さえも、教科書として有害無益と認定されて、唯の一冊も検定に合格しなかつた程である。

自由教育令を廃し改正「教育令」が公布されたのは、この年の暮も押し詰まつた二十八日の事であった。自由教育令は僅か一年三ヵ月間の寿命しかなかった。この改正について、三宅雪嶺は次のように述べている。

…学区の制を廃し、頗る規程を自由にせるが、為に教育が衰頹するに傾き…更に教育令を改正し、学区の制を復し、就学の督責を厳にし、小学校の学期を改む。……(以下略)

(『同時代史』第二卷)

教育衰退が自由教育令のみが原因とは言いきれぬにしても、地域住民の生活と文化に根ざした、創意に満ちた学校をつくり上げていくことが如何に難しいものであるかを物語るものである。

教育衰退の結果、民権派の中にも、政府による教育干渉を求める声があがった。教育行政に関して権限が押さえられていた地方官にとっては、教育衰退は、政府に意見を開陳するには恰好のものであったに違いない。

新「教育令」は、教育に対する国家の規程を示し統制を強化した内容であった。文部卿は、地方官を通じて文教行政をコントロール出来る立場に立ったのである。

翌十四年(一八八二)六月になると、教員の本分を定めた全十六項から成る「小学校教員心得」が制定された。そのうち第十四項目には、「政治及び宗教上に涉り執拗矯激ノ言論」をしてはならぬ、という規定が設けられた。

それは、教員が自由民権運動にかかわる事を禁じた内容でもあった。

政府にとって、自由民権運動は、徒に論争をまき起し、党派心を煽るもので、西欧諸国に追いつく事を目標とした近代国家形成への、国民の求心力を失わせる不協和音と見做していたのである。

わが国の自由教育論は、自由民権運動の盛り上りと共に育ち伸びてきたという特徴がある。

しかし、明治十年代後半の自由民権は、主として東日本の養蚕地帯の激化事件として頻発するが、民権運動は、この状況を打開する力を既に失い、自由教育論もすっかり姿を消してしまっていた。

先に述べたように、坂本易徳が明治二十二年(公外)、新設の慶応義塾大学部に入学した動機は、リベラル・エジュケーションを受けるにあった。自由教育という言葉は、世上には見かけなくなつたが、その本質は、新設の三学部それぞれ外人を主任教授に据えた義塾の中に脈々と生きていた。

坂本は、「政治、宗教、職業から離れ、人間としての資質、教養を高めるための教育」(『日本国語大辞典』

に憧れを持っていた。

坂本は、その憧れの故に文学科に入学したものの、法律科の講座にも魅力を感じて、科の枠を越えて受講したのではなからうか……。そしていつの間にか法律科の方にウェイトがかかり、転科してしまつたのか？

それとも転科しないまま越境受講を続けたため、法律科の学生との付き合いが多くなり、自ずと在学者名簿には、法律科のグループに入ってしまったのか？

以上は、私の勝手な推定であるが、これを究明するのは、困難であるので、このまま推論のままに止めた。

### ※

ともかく、坂本は北村透谷に、慶応義塾文学科に入学したと、告げただけに、同好の士とばかり、透谷は頻に文学談義をするのだった。

そして、二、三日たつて透谷は、約束通り長詩『蓬萊曲』を持って坂本の下宿を訪れた。

坂本はこのときの事を、やはり前日の通り文学上の談論をした、と述べるだけで詳細は分からない。

ついでながら、『蓬萊曲』について、透谷研究家の故勝本清一郎氏の評価を次に挙げておこう。

「……『蓬萊曲』には、

神の世界に魔の世界を対置して後者を肯定すべく懷疑し苦悩し思案した近代人の世界観芸術たる本質がある。自然とか魔とかいう漢字を「かみ」と読ませている訓法も注意すべきである。……日本の近代文学史にも当然なればならなかった筈の、歴史的な意味の世界観的作品が、前後を通じてただ一人、二十二歳の透谷によって成し遂げられたのである。語句や詩法の未熟さ・生硬さは末の問題である。」

坂本は何日か経って京橋区弥左衛門町の北村家を訪れた。透谷の父快蔵の家では家伝の金明膏を看板に出しその他売薬などを商売していた。尤も表面上は、透谷の実弟丸山垣穂の名義となつていた。快蔵が大蔵省に勤めていて、表向きまづかったからと思われる。

『蓬萊曲』の発行者が丸山垣穂であり、発行所・売捌所の養眞堂が快蔵の家と同じ弥左衛門町七番地となつているのも、その名義のためであつたらう。

透谷は妻美那と共に二階に住んでいた。坂本はこのとき始めて、透谷に妻のいるのを知つた。

坂本は、透谷が何処から何時妻として迎えたか尋ねたかつたが、美那の前で聞くのが憚られて思いとどまつたのである。

透谷が八王子辺にいた時分に迎えた美那が、神奈川県自由党の大立者で県会議長などを勤めた(その頃は八王子は神奈川県行政区域にあつた)石坂昌孝の娘であると、坂本が知つたのは、後で人に聞いてのことであつた。

坂本は、この透谷を訪ねた時の印象について次のように述べている。

その時分私が往來致しますものは無論学生間で、妻帯のものは一人もなく、又細君のある者といえ、保証人や先輩で、チャンと一家を構えた人達のみで

したから、北村君が細君と共に二階住居をされて居たのを見た時には一種異様の感想が浮かびました。若夫婦が舅姑と同住して居る有様を承知して居る私でありましたならば、この氏の二階住居について批評を下すことが出来ましたらうが、その頃純粹の書生氣質の私でしたから、今更何とも申し上げようもありません。

坂本は当時満二十五歳。自分より三つも年下の透谷が正式に結婚しているとは思ひもつかなかつたに違いない。

それにしても、「その頃純粹な書生氣質」とは、坂本がおくちな質であるのを物語るものであろう。

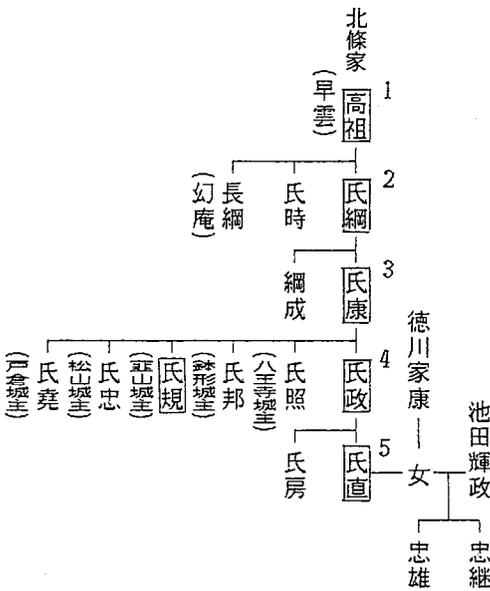
坂本の純粹さは、若かつた「その頃」だけではなしに、歳を経ても失われなかつたと思われる。後年、歌人窪田空穂が、紅蓮洞に対しての親しみを込めた歌二十数首を詠んでいるのも、俗人離れた坂本の純粹さを愛しての事であらう。

喰ひ残の搗栗錦の袋に...

北條家高祖の守の事

『翁草』※より

北條氏直の室家は家康公の御息女なり。小田原落城の時氏直は高野へ登山有り。離別の時氏直肌を守を取出し、此の守は高祖の守として當家代々傳わる處なり。其の由来は五代の祖早雲(初號新九郎盛時後改氏茂)。豆州より切て出で相州を攻平げ、明應三年(一四四四)九月十二日小田原城大森憲頼を攻落さる時、首途に出候搗栗を半分喰ひ残りを鎧の引合に納めつゝ向はれ



て、文祿元年壬辰(一六一)十一月四日三十一歳にて逝去せられ、北條の嫡流ここに於て断絶す。氏直後室を秀吉公の仰にて、池田三左衛門輝政へ再嫁せしめ給ふ。其の時後室より彼高祖の守を藝州(広島県西部)草津の城主北條美濃守氏規へ渡さる。其の口上に、我身事殿下の仰に仍り再縁致候。此の守は松厳院殿(氏直)如此申置れ候。足下は少身ながら一城の主たるを以て是を傳へ候と涙ながら仰遣はれけるとなり。輝政へ再嫁有て後、御子二人出生。左衛門督忠繼、宮内少輔忠雄是なり。當時因州(鳥取県東部)鳥取城主の祖なり。

資料紹介

昭和十五年十一月二日

足柄町役場函

足柄町各区长殿

入管兵附添人全廃其他注意ノ件 標記ノ件ニ付今般左記ノ通り本縣下一般ニ決定セラレ候条貴区内一般へ周知方相煩度 右及通牒候也

一入管兵附添人全廃ノ件(応召兵モ全) 本年度ヨリ入管兵ノ附添人

(※)翁草 随筆。神沢貞幹著。初めの百巻は安永元年(一七三)成立、後に百巻を追加したので、更に書き起して二百巻とした。池田義象の校訂で明治三十八年(一八六)刊。鎌倉・江戸時代の伝説・奇事・異聞を諸書から抜き書きし、また著者の見聞を記録。

録。

(註2)搗栗 栗の実を殻のままほして臼で搗ち、殻と渋皮とを去ったもの。搗つと勝と通ずるから出陣や勝利の祝い、正月の祝儀などに用いた。押栗。

(註3)痘瘡 疱瘡。天然痘。

(註4)池田輝政 織田信長に従い、後秀吉に仕え長久手・小田原に戦い、関ヶ原では家康に属し功をたて播磨五

十二万石を与えられ姫路城主となった。

(註5)北條氏規 氏康の四男。韭山城主。天正十八年小田原合戦では家康の言を入れ韭山城を開城。氏規と家康は、年少時に、今川氏の人質として共に過ごしており、互いに親近感を持っていたと思われる。小田原城落城後は氏直と共に高野山に赴いた。後に許され河内で六千九百余石を受けた。河内狭山藩主北條氏は氏規の後裔。

芸州草津城主の記録は見当らない。

(参考文献)

『広辞苑』『寛政重修諸家譜』『藩史大辞典第五巻』

四、防諜ニ関スル件

一般ニ軍事機密保持ニ留意シ 防諜上特ニ注意スルコト

(下井、細田区有文書)

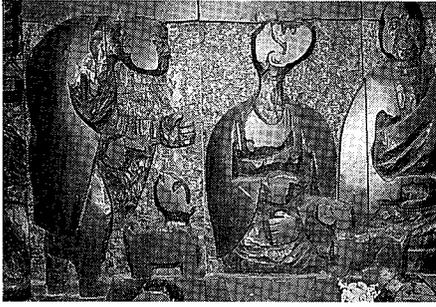
従来居住地ヨリ入管部隊迄赤又ハ白等ノ襷ヲ着用セシモ之等ハ防諜上ノミナラス物資愛護ノ見地ヨリ之ヲ全廃セラル 三、入管兵欲送ニ関スル件(応召兵モ全) 祝旗ハ町ヨリ贈呈ノモノ一本トス 但シ小國旗ハ此ノ限りニアラズ 以後は内ないの入隊となる。

### 落穂集

◎今年は、八月始めまでは蟬の音が聞けなかった。新聞もそれを採りあげていた。ただごとではない、天変地異のきざしかなと、思っていたところ、十日ごろから鳴き始めてホットした。季節の移り変わりに相応した自然界の動きは好ましいものだ。

ともかく八月始めまでは、ときに暑い日があっても、全般的には涼しい日が続いた。冷夏というべきものだろう。ところが、八月末から九月五日迄、例年がない残暑が続いた。

◎写真は、去る六月初旬小田原栄町ニチイ文化ホールで開かれた、みの島義一個展で展示された版画十数余の一つ。みの島画伯は井上三綱氏の又弟子で、油絵から木彫に転向、現在平塚に



在住。この写真は、中国南宋時代禅僧慧開和尚が残した公案四十八則をおさめた、『無門関』にある話からとった作品だという。表現される人物像はいずれもユーモアたっぷりな作品。

「湘南原人」の異名を持つみの島氏のことを第二の棟方志功という人もいるようだが、ともかく注目すべき画風をもった作品を創り続けている。

◎幕末、日露和親条約締結のため来航のディアナ号にまつわるドキュメンタリー番組制作のため、ロシア国営テレビ「オスタンキノ」一行が取材のため去る七月来日。伊豆下田や戸田で番組収録。下田郷土資料館では、本年四月本会総会の折「ロシアから来た黒船」と題した講演をいただいた、「ペテルスブルグから来た黒船」の著者・大南勝彦氏がホスト役になり、コメントータの作家ミハイル・ザドルノフ氏と対談。ザドルノフ氏の父は、「北からの黒船」の著者。

製作番組は「津波」(仮題)で、江戸末期日露和親条約締結のため来航したディアナ号の史実がテーマ。ディアナ号は、安政大地震(八咫)の津波で大破、修理のため回航中沈没。代船が戸田港で日本の協力により建造された歴史がある。番組はエリツィン大統領の来日にあわせて、ロシア全土に放映される予定であっ

たというが?

◎小田原市栄町二丁目十三番(小田原銀座)の再開発計画によるB棟建設については八月末頃他所で営業していた店のうち、二、三の商店が戻ってきたため、再開発が中止されたこと、誤解された人もいるようだが、中止された訳ではなく、近々新プランが示されるとの事。なおA棟は建設中であるが、一〇八台の車を収容できる施設が作られ、その分売場面積縮小で対応の由。

◎『歴史的町名保存碑』を調べてみると、下部が湿ったのが幾つかある。どうも犬が電信柱代りにするらしい。その予防に犬が嫌う臭いでも開発されないものか。

### 会員消息

◎宇佐美ミサ子氏、この程「日本女性の歴史」性・愛・家族(総合女性史研究会編 角川書店発行)のⅢ近世編に「遊女と飯盛り女」を執筆分担された。

◎高野肇氏(高野書店主)は、近く発刊の『神奈川古書組合三十五年史』に、「神奈川人物書物誌」「神奈川古書店名簿」(明治以降戦前迄) 他を執筆分担された。

◎加藤水虹(茂雄)氏は「藍工房作品展」を九月二日(水)より七日(月)までアオキ画廊に

### お詫ひ 一四九号 訂正

頁段行	誤	正
12	浮世絵鑑	五右衛門風呂底ぬけの国
13	標 題	学徒労働員の記録
19	5 15	『極東会報告誌』
20	2 14	五郎兵衛
22	4 33	郷土史目次紹介
23	1 20, 21	大正六年(一九一七)十月一日(日)〜二日(月)
24	2 10	虫がいなくて良いなと
		虫がいなくて良いなと

於て開催された。水虹氏の趣味の日本画を伝統技術の藍染めに生かされた「染め絵」の創作は素晴らしい、今回は二回目の展示だが、昨年に比べ、一段と充実した内容であった。

◎込山和勇氏(特別賛助会員昇五社長)が会長の北條氏遺蹟顕彰会による第四十一回北条氏政・氏照墓前祭が七月十一日(土)十一時より行われ、小田原市長・市会議員が列席。本会からは、高田喜久三会長、和田登、岩本武、岡部忠夫四氏のほか、奥津繁氏が位牌所の伝心庵檀家総代として出席。

◎山村武彦氏(特別賛助会員優光り。

### 小田原史談会諸行事等

西伊豆史跡探訪 平成四年五月三十一日  
 (回)七時三十分小田原駅前出発。  
 十七時二十分帰着。

(コース) 修善寺(修善寺) 戸田峠 戸田村立造船郷土資料博物館(昼食) 村宮国民宿舎 戸田荘 宝泉寺(戸田村) 土

